

ミヒャエル・エンデ著『鏡のなかの鏡』：
迷宮の中のホメオパティ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 良孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000485

ミヒヤエル・エンデ著『鏡のなかの鏡』

— 迷宮の中のホメオパティ —

小 林 良 孝

『鏡のなかの鏡』は、エンデが10年来書きためてきた短編のうち30編をまとめて、1983年彼が54歳の時、出版したものである。この頃までにエンデは既に数々のすぐれた長編童話および短編童話を世に送り出し、それらの多くはドイツのみならずヨーロッパ各国の数々の児童文学賞や青少年文学賞を授与され、世界中に名の知られたベストセラー児童文学作家であった。その代表的なものは、1960年『ジム・クノッフとルーカス』(Jim Knopf und Lukas der Lokomotivführer)、1962年『ジム・クノッフと荒くれ13』(Jim Knopf und die Wilde 13)、1972年『モモ』、1979年『はてしない物語』、これらの名作の後に続いて出版されたのが、この『鏡のなかの鏡』であった。しかし、この『鏡のなかの鏡』は極めて不評であった。エンデ自身、子安美知子氏との対談の中で次のように語っている。

子安 ……こんどの新著『鏡のなかの鏡』の反響はどうなんでしょうか。これは、あきらかにおとなの読者を対象とした作品で、表面的にはこれまでのエンデさんのスタイルと違うふうにも見られます。

エンデ 日本の『朝日新聞』が書評を出してくれたそうですね。

子安 ええ、ちょうど私の出発前に、新聞と、それから今回のインタビューを頼んできた『朝日ジャーナル』も書評をのせました。

エンデ あの作品をほめてくれているとか、うれしいです。ドイツでは、ほとんどこきおろさんばかりの悪評でしたから。

子安 そういえば、私も『ツァイト』紙に出ているのを読みました。

エンデ ……西ドイツでは、『鏡のなかの鏡』は、だいたいにおいて読者のひんしゆくを買う結果になりました。みんなを混乱させたというのか……。

子安 ……子供の読みと、おとなの読みと違いがあるのではありませんか。おとなが、それもインテリのおとながとくに、頭で知的に理解しようとするから、混乱するのでは。『ツァイト』に出ているのはずいぶん長いも

のだったけれど、『鏡のなかの鏡』の30の短編を、それぞれ現代の社会批判に結びつけようとしたり、フロイトやカフカの世界と関連させたり、なにか学術論文的に分析しようとしている。子供が『モモ』を読むときのように、すっぴり中に浸らない。文学作品というのは、中に浸りこまなかつたら、おもしろくは読めないと思うのですが、とくにエンデさんの場合、ご自分でいつもおっしゃっています。……「私の本は、分析されたり解釈されたりすることを望まない。それは体験されることを願っている」と。

エンデ　そうです。『鏡のなかの鏡』を批評した連中は、解釈しようとしている。だから、彼らにはこの作品がわからなかったのです。⁽¹⁾

いや、「解釈しよう」としなくたって、この作品は、一読しただけでは、すっきりとわかったという実感は与えてくれない。まず第一に、30編の短編の関連がはっきりとは見えてこないのである。その上、個々の短編は、大多数、中にはとても明晰判明な印象を与えてくれる短編も少数ながらあることはあるが、その多くは超日常的な夢の中の世界のような不可解な印象を与えるだけで、しかも、その大部分は何か暗い印象を与えるだけで終わるのである。だから、これらの短編を読んだ時の感じは、何か得体の知れない怖い夢を見て、その途中で目をさました時の感じと多少は似ている。

それから、この物語『鏡のなかの鏡』の表紙をよく見ると、<Ein Labyrinth>という副題がついている。ラビリントス（迷宮）と言えば、まずはじめに頭の中に浮かんでくるのは、クレータ島のミノース王と王妃パーシパエのこと、ミノタウロスのこと、特に王女アリアドネーとアテナイから貢物として献上されてきたテーセウスのことなどである。それなのに、エンデの『鏡のなかの鏡 ラビリントス』を第1話から読み始めてどこまで読んでいっても、一読しただけでは伝説のラビリントスにまつわる上記のような登場人物は1人も出てこない。ただし、第2話には、父ダイダロスとその息子イーカロスとの2人にまつわるラビリントス脱出伝説を明確に連想させる短編が配置されてはいるけれども、その後、第3話から第29話に到るまで、伝説のラビリントスを明確に連想させる話は一つも出てこない。しかし、第30話になって、つまりこの物語の最後になって、ラビリントスとおぼしき建物の門が描写されていて、やがて、嚴重に警備されているその入り口の前に明らかにテーセウスとおぼしき若い闘牛士と明らかにアリアドネーとおぼしき若い娘が2人でやってきて、意味深い対話をする。実はこの対話は、特にアリアドネーとおぼしき若い娘の独白は、この物語の『鏡のなかの鏡 ラビリントス』の著者 M. エンデ自身の、この物語の構

想をよく説明しているのである。それはそれとして、その意味深い対話の後、この若い闘牛士は、この若い娘から例の「導きの糸」をもらえないまま、ラビリントスの入り口の扉を通過して、ラビリントスの中へ姿を消すのである。扉の外、ラビリントスの外に残った若い娘は、この闘牛士の運命を預言し、この闘牛士を哀れんで、この第30話、つまり、物語『鏡のなかの鏡 ラビリントス』は終わる。この物語のこの終わり方は、我々読者を大いに混乱させる。我々の大方の頭の中では、ラビリントスの伝説は、普通はアリアドネーとテーセウスの出会いから始まるのである。だから、我々の自然な観念の流れからすれば、物語がやっと始まったらしい所で、この物語『鏡のなかの鏡 ラビリントス』は終わるのである。つまり、エンデのこの物語は、我々の想念の自然な流れからすれば、始まりが終わりになっているのである。それ故、我々は、少なくとも本稿の筆者は混乱する。筆者には経験はないけれども、催眠術にかけられた者が催眠から完全にさめないうちに、現実世界の中へ放り出された時は、ひょっとしたらこんな感じになるのかもしれない。この混乱を避けようとするなら、エンデのこの物語は、この物語の最後の第30話から読み始め、それからこの物語の最初の第1話にもどって、それから順に第2話、第3話へと読み進んでいけばいいのである。しかし、正にこれが、つまり「終わりは始まりである」ということが、ミヒヤエル・エンデの一つの基本的構想なのである。「終わりは始まりである」という命題を、一つの短編に仕上げた作品が『鏡のなかの鏡』の中にある。それは、「暗い空の下に人の住めれなくなった国がある。」という書き出しで始まっている第24話である。この短編には後に言及せざるを得なくなるから、ここではこれ以上立ち入らない。キツネにつままれたような気分で第1話から読み進んできて、第30話に到ってやっとアリアドネーとおぼしき人物と、テーセウスとおぼしき人物に出会って、いくぶんほっとした気分になる。やれやれ、これからやっとテーセウスがミノタウロス退治に出かけて行ったようだわい、と思ったとたんにこの物語は終わる。これでは、読者はたしかに混乱する。しかし、著者エンデは内心、得意満面、「してやったり！」というところだろう。なにしろ、この物語は「迷宮（ラビリントス）」なのだから。

しかし、そうはさせじ！ というのが本稿の筆者の無粋なくせである。エンデがあれほどそうしないようにと忠告していた理屈をこねくりまわして、スズメの涙ほどの山勘（想像、ひらめき、直覚）を働かせて、——これならエンデもおおいに励ましてくれるであろう——この『迷宮』の構造と、この『迷宮』の中で起きている現象を白日のもとにさらけ出して見ようというわけである。

1. 『鏡のなかの鏡』の基本的構想

この物語の副題は『迷宮 (ラビリントス)』となっているから、古代ギリシア神話を知っている人ならば、クレータ島の王ミーノースが名建築家ダイダロスに命じて造らせたラビリントスを連想し、ミノタウロス、テーセウス、アリアドネー等々の登場人物にまつわる伝説を思い出すことであろう。さて、こういう先入観を持ってこの物語『鏡のなかの鏡 ラビリントス』を読み始めても、最初から面食らい釈然としない。まず第一に、この最初の短編のみならず、どの短編にも標題がついていないのである。だから内容の見当をつけようにも、見当のつけようがない。標題がついていないのみか、各短編の終わりはページが改められ、次の短編の第1行目だけ大文字に印刷されているだけで、第1とか第2とか第3とかの各短編の通し番号さえついていないのである。ページが改められている所まできたら、どうやらこの編はここで終わりらしいと思うしかない。だから30編のうちどの短編のことを指すかは、その短編の最初の一文を標題代わりにあげるしかない。しかし、有り難いことに、丘沢静也訳『鏡のなかの鏡』(岩波書店 1985年)には、各短編の始めに、1、2、3、……と30まで、通し番号がつけられている。これは、エンデの構想にはなかったものではあるが、あれこれ論じる者にとっては、この通し番号は誠に便利である。本稿でもこの番号による出典箇所の指示も取り入れていくことにする。

『鏡のなかの鏡』の最初の短編は、次のように書き始められている。

ごめんね、僕はこれ以上大きな声で話すことはできないんだ。

君が、そう、僕が語りかけている君が、いつ僕の語りかけに気づいてくれるか、僕にはわからない。

そもそも、僕が君に語りかけているのに君は気づいてくれるのだろうか？

僕の名前は、ホールなのだよ。⁽²⁾

このホールとはどういう人物であろうか。ホールは、ドイツ語の原文では「Hor」である。これは人名であるからそのまま音写して「ホール」と表記せざるを得ないのだけれども、実はこれではこの語に込められている重要なメッセージが完全に脱落してしまうのである。そのメッセージを見落とさないために、ドイツ語の原文に当たって考えてみなければならない。原文では、

Und wirst du mich überhaupt hören?

そもそも、僕が君に語りかけているのに君は気づいてくれるだろうか？

Mein Name ist Hor.

僕の名前はホールなのだよ。

となっているのである。ここでは、主人公とおぼしき僕の最大の懸念は、僕が語りかけている相手である君が、僕が語りかけている（無音の）声にもそもそも気づいてくれる（hören. 聞く→僕の語りかけに気づく）だろうか、ということなのである。その懸念を表明した後に、僕の名前はホール（Hor）なのだ、とたたみかけているのである。そこで、hören という動詞と、Hor という名前の関連に注意しなければならない。Hör は hören という動詞の、君（du）に対する命令形なのである。この Hor という名前は Hör! をもじったものなのだ。つまり、Hor（ホール）という名前には Hör!（聞いてください！）という意味が込められているのである。³⁾このことを考慮に入れた上で Mein Name ist Hor. というドイツ語の文の訳を考えなおせば、この文の訳は、

僕の名前は「聞いてください！」なんだよ。

ということになる。要するにこの発話は、「僕」から「君」に対して発せられた切実な対話を求めるメッセージなのである。しかし、ホールのこのメッセージは、声なき声、すなわち沈黙である。この沈黙についてはエンデ自身、この物語の最後の最後で、アリアドネとおぼしき王女の口を通して明確に物語っている。王女は、セーテウスとおぼしき若い闘牛士がラビリントスの中へは行って行ったのを見とどけて、次のように預言しているのである。「おまえは数々の変身を経て、…最初の文字、すなわちあらゆるものに先立つ沈黙になるであろう。」この預言によれば、この物語の冒頭に登場してきたホールは、ラビリントスの中で変身に変身を経た若い闘牛士にちがいないのだ。そしてこの物語は、王女の預言通り、「許して、僕はこれ以上大きな声ではしゃべれない。」というホールの声なき声、すなわち沈黙から始まっているのである。こうしてこの物語は、最後と最初が直接連結している。この物語のこの円環構造は、この物語を2回以上読んで初めて見えてくる構造なのである。

それでは、ホールと称する「僕」とは何者で、その相手である「君」とは何者なのであろうか。これを解く鍵は、エンデ自身の言葉の中にある。エンデは子安氏との対話の中で、『鏡のなかの鏡』について次のように述べている。

エンデ このタイトルは、禅の公案からもらいました。「鏡のなかには何が映っているか」と問う公案があるでしょう。答えは「何も映らない」となりそうですね。でも、そうでしょうか？ ちがいます。ほんとうは、ここでひとつのプロセスが始まります。こちらからあちらに映し、あちらからこちらに映し返される、無限の映し返しのプロセス——2枚の鏡が向き合おうと、こうして何ごとかが発生するのです。

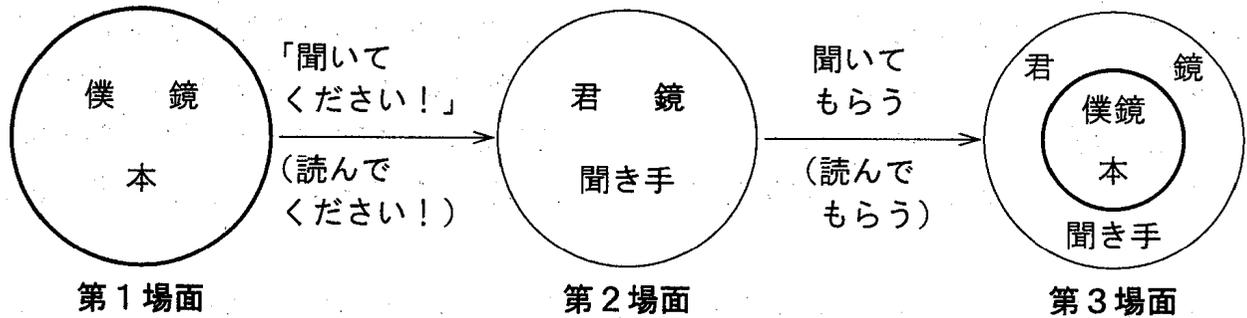
本を読むときにも、本と読者のあいだに似たプロセスが生じます。だから、同じ本をふたりの人間が読むとすると、そこで読まれるものは、けっして同じではないと思います。それぞれが、本のなかに自分をつれこむからです。自分の連想、自分の思考、自分の経験、自分の感受性、それらすべてを投入して読む。だから本はいつも、ある意味では読者を映す鏡です。逆に、同一の人がふたつの違う本を読むとすると、こんどは、そのふたつがそれほど異なりあう本ではなくなる。たとえそれらが、たがいに違う資質の作家のものであってもです。同じ読者が読むと、ふたつの本は共通する何かをもつことになる。鏡を見る読者が同一人物だからです。

この本のタイトルは、ですから、読者がこれらの話を読んでいるとき、自分のなかに何が生じるか、しっかり注意と意識をはたらかせてほしい、と、こんな意図でつけたものです。⁽⁴⁾

ここから明らかなように、僕・ホールの正体は、この本の著者ミヒヤエル・エンデ自身であり、同時にこの本『鏡のなかの鏡』である。そして、ここで「君」と呼びかけられているのは、この本の読者一人ひとりである。そしてまた、エンデが言うには、読者もまたその本を映す一種の鏡なのである。こうして、本は読者を映す鏡であると同時に、逆に読者はまたその本を映す鏡なのである。そして読書するということは本鏡と読者鏡が向かいあうことだというのである。ただし、鏡とはいっても、向かいあうこれら2枚の鏡は、初めっから双方とも何も映っていない鏡ではない。この、本・鏡には、対話・映し合いが始まる当初から30編の短編が写しこまれてしまっているのである。他方、読者・鏡にも、その読者固有の連想、思考、経験、感受性等々、その読者の人柄が、読書が始まる当初から既に映しこまれているのだ。鏡は鏡でも、この点でガラスの鏡とは違うのだ。エンデの分身とも言うべきこの本・鏡は、読まれなければただの本という物にすぎない。けれども、ひとたび読書のプロセスに入り、読者と向かいあえば、その読者の心に反応して千転万化し、成長する物、いわば生き物なのである。勿論、読者・鏡は各々固有の心を持っている生き物である。つまり、この物語『鏡のなかの鏡 ラビリントス』の鏡は、双方とも不思議な生きものなのである。生きているのは読者だけではない。読書のプロセスの中では、本の方も読者の心の変化に応じて変化する一種の生きものとなるのである。

読書のこのプロセスは、本・ホール・僕鏡の側から見れば、ホールの声なき声の聞き手である君鏡の心の中に、僕鏡すなわち『鏡の中の鏡』という本を映してもらおうプロセスなのである。これを図で示せば、第1図のようになる。

第1図



この場合、『鏡のなかの鏡』の『鏡……』の鏡は、「君」（聞き手）であり、『……の中の鏡』の鏡は、「僕」すなわち「ホール」すなわちこの本の著者エンデである。第3場面の本（僕鏡）は、第1場面の本（僕鏡）とは、質、量ともに異なるはずである。聞き手である「君」は、僕（本）を全部聞いてくれるとは限らない。君（聞き手）の心の中に映し取ってもらった僕（本）は、僕のほんの一部分かもしれない。それに、君の心（君鏡）の中に映し出されている僕（本）は、鏡像としての僕（本）であって、必然的に第1場面での僕（本）とは全く同じではあり得ないのである。それに、僕を映してくれる君（聞き手）の心の状態によって、すなわち、君の感受性、君の経験、君の思考、君の連想などによって、すなわち君鏡の状態によって僕（本）の鏡像は必然的に質も変化せざるを得ないのである。しかも、その変化は量も質も固定的なものではない。君（聞き手・読者）は、生きものであるから、君の心の状態はたえず変化する。すなわち、君鏡の状態はたえず変化する。それに応じて君の心に映し出される僕（本）の鏡像もたえず変化せざるを得ないわけだ。それに、僕（本）の鏡像は、常に君の心の一番重要な中心部分に位置しているとは限らない。君の心のおもむくままに、僕（本）の鏡像は、姿を変え、大きさを変え、質（意味）を変えながら、君（聞き手）の心の鏡の中を浮遊しているというわけだ。

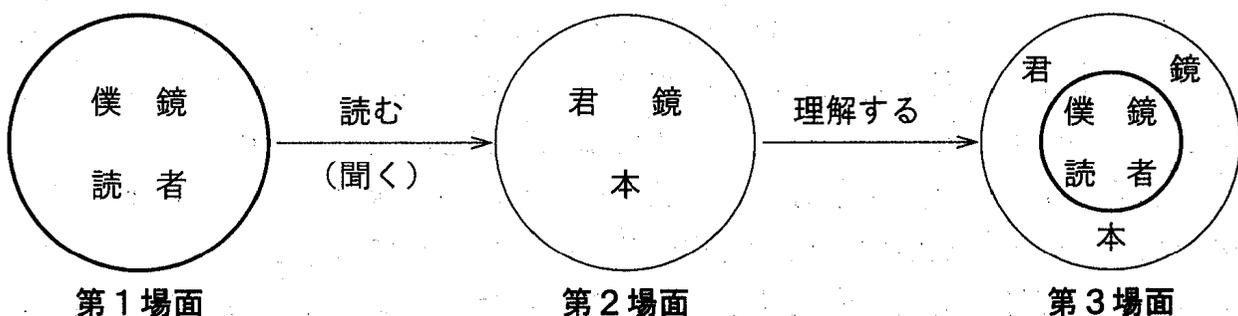
さらに、君（聞き手、読者）が僕（本）に耳をかたむけ意識的に聞いてくれる時、君は単に受動的に僕を映し取っているだけではない。君はガラスの鏡ではない。感性と知性をそなえた生きものなのだ。僕に耳をかたむけ、君の心の中に僕を映し取りながら、それと同時に、君は、映し取った僕の鏡像に対して能動的に何かを感じ、何かを考え、何かを予感し、何かを体験しているはずだ。こうして君自身も変化して行く。君の変化は、それと同じに、さらにまた僕の鏡像の変化を結果する。君が生きていて、君の心に変化する限り、この相互変容のプロセスはいつまでも続く。これが、鏡と鏡が向き合った場合、「何

ごとかが発生する。」ということの意味なのである。つまり、第1図の第3場面の中における本（僕鏡）は、第1図の第1場面における本（僕鏡）とは同じではないのである。同様に、第1図の第3場面における聞き手（君鏡）は、第1図の第2場面における聞き手（君鏡）とは同じではないのである。第1図の第3場面では、双方に何ごとかが発生してしまっているからである。それが読書というものだ。

では、『鏡のなかの鏡 ラビリントス』の場合、この「何ごとか」とは何か。これは、エンデにとっても、我々読者にとってもきわめて重要である。これについては、もう少し後に言及することにしよう。

以上において、ホール（僕、本、エンデ）の側から読書において発生するプロセスを考察してきた。これを今度は、ホールの呼びかけにこたえる側から見ても、主客が逆転するだけで、つまり、僕と称するものがこの本の読者となり、君と呼びかけられるものがホール（本）となるだけで、この両者の間に全く同様の「何ごとかが発生する」ことになるのである。これを図示すれば次の第2図のようになる。

第2図



エンデの考えでは、読書するということは、「本のなかに自分をつれこむこと」だという。つまり、「自分の連想、自分の思考、自分の経験、自分の感受性」それらすべてをその本の中に投入することだという。これを本の側から言えば、読者が本を読む時、本は読者を映し取るということになるのである。この意味でエンデは、「本は読者を映す鏡である」と言う。第1図の場合は、ホールの語りかけに耳をかたむける側が、つまり読者がホールを、すなわち本を映す鏡であった。つまり、読者は本を映す鏡であり、同時に本は読者を映す鏡なのである。読書するということは、読書と本が互いに向かいあうこと、鏡と鏡とが互いに向かい合うこと、鏡の中に鏡を映すことなのである。

読者の側から言えば、本を読む自分の心は自分の内面の世界、すなわち内界

であり、向かい合っている本は自分の外にあるもの、すなわち外界である。エンデは言う。

エンデ ……どうにかして外部世界と内面世界を、もういちど相互に浸透しあえるもの、循環可能なものにしていくこと、たがいを鏡として、そこに映し出し、映し返されている姿が見つかるようにならないと、極言すれば、私たちは文化をすっかり失うことになります。なんとしてでも可能性を見つけださなければいけない。それは私にとっての急務です。⁶⁾

これは、エンデと子安美知子氏との対談の中で、話題が『モモ』に及んだ時のエンデの発言であって、『鏡のなかの鏡』のみに関連しての発言ではない。それだからこそ、かえって彼のこのことばは重みがある。『鏡のなかの鏡』という標題は、正にここで彼が言っている外部世界と内部世界（内面世界）との相互の映し合い、相互浸透、相互循環を完璧に表現している標題なのである。すなわち、『鏡のなかの鏡』という本は、彼の著作活動すべてにおいて、彼が実現すべき急務と認識していた内面世界と外部世界の完璧な相互循環の実現を企画した作品であると、見て取るべきなのである。しかし、この作品は、きわめて不評だったという。また、読者を混乱に陥れたという。とすれば、エンデの意気込みとは裏腹に、本と読者との相互映し合い、相互浸透、相互循環という彼の文学の最も重要な基本構想が完璧に実現されているとは、思えない。ただしこれは、この本に対する一般的な読者の反応を見ての判断である。

しかし、人は様々、読者は様々である。エンデの言うとおりに、本を読む時、人は自分の連想、思考、経験、感受性など、自分のすべてを投入してその本と向き合うのである。だから、多くの読者の中には、少数ではあっても、この『鏡のなかの鏡』と完璧なまでに相互の映し合い、相互浸透、相互循環を実現する場合もあり得る。これを実現するためには、この本への接し方に、一種独特のこつが必要なのである。DER SPIEGEL IM SPIEGEL Ein Labyrinth (1994年 Weiterbrecht Verlag) の厚くて硬い表紙の上には、美しいデザインの化粧表紙がまかされている。その化粧表紙の折り込み部分に、エンデはこの本の読者に対する次のような忠告の言葉を載せている。「この（内面）世界旅行にのりだす勇気や超勇気を十分持ち合わせている理想的な読者は、同感や違和感、思想や幻想にふれて自分の心の中にかきたてられてはまた消えていく予感や記憶、色彩や形象、いろんな心の動きなどには一切頓着せず、そういうものはそのままただ放置しておきましょう。」この本を理解するには理屈で解ろうとせず、「まるで音楽を聞くように」ただありのまま感じていけばいいというのである。「そ

して、その際、読者自身がそれに対して何を感じたか、その感じるものに気づくようにしましょう。」と言っている。つまり、この本は一種のシンフォニーである。だから、シンフォニーを聞くような心構えでこの本を読んで、そして感じるがままに感じて欲しいと言っているのである。

では、エンデが読者に「その感じるものに気づくように」忠告し、願っているものは何であろうか。『鏡のなかの鏡』の読者に、エンデは何に気づいて欲しいと願っているのであろうか。「2枚の鏡が向き合うと、こうして何ごとかが発生するのです。」というその「何ごとか」とは、何なのであろうか。これについてもエンデは、子安美知子氏との対談の中で次のように明解に言っている。

エンデ ……シェイクスピアの芝居を見に行ったとする。そのときもです。私は決して利口になって帰るわけではありません。何ごとかを体験したんです。すべての芸術において言えることです。本物の芸術では、人は教訓など受けないのです。前より利口になったわけではない。より豊かになったのです。心が豊かに——そう、もっと言えば、私のなかの何かが健康になったのだ、秩序をもたらされたのだ。

およそ現代文学でまったく見落とされてしまったのは、芸術が何よりも治癒の課題を負っている、というこの点です。啓蒙ではなくて——啓蒙は、最も非本質的な課題です。……

子安 ところで『鏡のなかの鏡』のような作品で、エンデさんのおっしゃる治癒作用というのが、どんなふうに出ているか、ふつうの読みではわからないかもしれません。……

エンデ ……私が「治癒というときには、ホメオパティータ的な治癒のことをいうのです。……ホメオパティータの薬は、もともと毒、それも猛毒をもとにします。ただそれを薄めに薄めて、物理的、肉体的には何の毒にもならないほど稀薄にしてしまう。あとには毒の潜在性だけが残ります。それがかえって逆に毒への対抗力を生ぜしめる。こんなふうにして、実際、肉体の病気に、ホメオパティータ薬品はよく使われていて効果をあらわしています。

『鏡のなかの鏡』には希望がないとか、慰めの要素が欠けているとか、それはドイツの書評でもよくいわれました。でも、彼らは、私が今いったホメオパティータ効果のことを、この本のなかに読み感じとれないんですね。……芸術はいつも、醜いもの、虚偽、悪を描いてきました。ゴヤの絵を思い出してください。あるいはミケランジェロ。本当の芸術は、耐えられな

いほどの悪や罪を描きます。悲劇の名作なんか、ほんとうに耐え難いものです。でも、それが舞台という魔術的な次元に移しかえられることによって、ホメオパティ―的方法で観客のなかに逆方向の力を呼びさします。観客をかえって健康にしてくれる力です。それが芸術の秘密です。⁽⁶⁾

エンデがこの本の読者に、「その感じたものに気づくようにしましょう」と忠告していたその「感じるもの」とは何か。2枚の鏡が、すなわち読者とこの本が向かい合うと「何ごとかが発生する」というこの「何ごとか」とは何か。上記の引用から明白である。それは、この本が読者の心に与えるホメオパティ―効果、すなわち治癒効果である。つまり、この物語『鏡のなかの鏡』を構成している30編の短編は、読者の心を健康にするためにエンデが調合した薄めに薄めた猛毒であるということになる。

2. 迷宮の中のホメオパティ―

『鏡のなかの鏡』の第1話は、その内容から判断すれば、明らかにこの物語の最後の第30話の続きである。第30話は、次のような内容である。アリアドネーとおぼしき若い王女は、テーセウスとおぼしき若い闘牛士を、伝説とはちがって、導きの糸を与えずに、ラビリントスの中へ送り込む。そして、感慨にふけりながら王女は独白して、闘牛士の運命を次のように預言する。

おまえは、次から次へと別の姿へ変身し続けるでしょう。そして、その度毎におまえは目覚めたと思う。でも、おまえは前にみた夢を思い出すことはもうないでしょう。おまえは生と死を通りぬけて、自分自身の記憶を辿って、内界からさらに内界の内界へと、最も奥の内界へと落ちて行くでしょう。こうしておまえは、いつも別人でありながらいつも同一人物であり、その区別はなくなるでしょう。おまえは、殺そうと思っているあの人に追いつくことはないでしょう。なぜなら、おまえが彼を見つけ出す時には、おまえは彼に変身してしまっているからです。おまえは、最初の文字に、すなわちすべてのものごとに先立つ沈黙になるでしょう。⁽⁷⁾

そして、この第30話は王女の次の言葉で終わっている。

「私は扉のむこうの弟のことを、私のかawaiiそうな弟ホールのことを考えていたのです。……かawaiiそうな、かawaiiそうなホール。」⁽⁸⁾

すなわち、ホールはラビリントスの最奥にいるミノタウロスであり、同時にまたテーセウスなのでもある。さらに、ホールはすべてのものごとに先立つ「沈黙」すなわち「声なき声」なのである。

この第30話の世界をそのまま受け継いでいるのが第1話なのである。そして、この沈黙であるホールが、声なき声で「聞いてください！」と読者に呼びかけるところから始まるのが『鏡のなかの鏡 ラビリントス』なのである。それ故、この物語が展開される第1話の場面はもう既に、ラビリントスの中である。そうであると同時に、そこは、若い闘牛士によって持ち込まれたありとあらゆる人間社会であり、現代の人類が活着している大宇宙でさえある。いわばラビリントス系宇宙とでもいうべき世界である。主人公は、ミノタウロスであり、テーセウスである。ミノタウロス、テーセウスとはいえ、伝説の彼らの面影は、もはや簡単には見分けがつかない。彼らは、転生に転生を経て、第1話から第29話に登場する、ありとあらゆる役者に変身しているからである。これで、この物語の段取りはわかったことにしよう。

さて、エンデの言うところでは、この迷宮の中で繰り広げられる物語が、読者に対してホメオパティによる心の治癒効果をもたらす、というのである。とすれば、第1話から第30話は、心に対する薄められた毒である、ということになる。それでは、心に対する毒とは何であり、それがどのようにして薄められているのか、これが本稿で解明されるべき問題である。

まず一般的に考えて、心を毒するものとは何か。それは、まず第一に人間の心を病におかし、その人を死に到らしめるもの、及びことである。それは第一に、心・身を含む人間存在そのものに対する破壊的現象、それに伴う心理的被害、例えば災厄、不幸、苦、恐怖などである。第二に、人間性を損なうものやことのみならず、人間性の向上を阻むものやことも、心に対する毒の部類に入るであろう。要するに、それらは心を暗くする物事である。それらの個々のものやことは、これから言及するこの本の各短編で具体的に明確にすることとして、本稿ではそれらを「暗」と呼ぶことにしよう。ということ許してもらえたら、心に対する毒とは「暗」である、ということになる。とすれば、毒を薄めることは「暗」を薄めること、「暗」に加えて、ないしは混入してその暗さをやわらげること、つまり明るくすることであろう。この心を明るくするものやことを「明」と呼ぶことにする。暗が多ければ多いほど、あるいは「暗」の暗さが深ければ深いほど、それを薄める「明」も多くなければなるまい。あるいは、それに応じて「明」の明るさも強烈でなければならない。この物語の中では「明」とは何か。そしてそれは、この物語の中の「暗」を薄めるに足りるほどあるのか、それともそういう物事はこの『鏡の中の鏡』の世界には存在するのか、存在しないのか。これを以下の本稿において検討することとしよう。

2-1 暗と明の対応の類型

(1) 男・女関係の不和と和

ラビリントス系宇宙の住人も男性と女性である。この世界にも、明らかに男女両性間の不和、両性間の憎悪、両性間の不信感、両性間の行き違い等に起因するいろいろな出来事が語られている。

暗 第9話 この短編は次のように書き起こされている。

母の顔は泥炭のようにどす黒い。でっかいおしりでテーブルの上にしゃがみこんで、噛んでいる。……大時計が、止まることなく時を打ち続けている。後悔の時を、祈りの時を、青い時を、朝の時を、昼の時を。

そして夜。母はそれを見ない。

暗い廊下にやせこけた人影が動く、彼女の夫だ。

「コーヒーをいれようか？」と彼はつぶやくようにたずねる。

母は何も聞いていない。彼女はいびきをかいて眠っている。そしていびきをかいて眠っている間に、3人の子供を産む。男の子は死に、2人の女の子は生きる。……夫はその男の子を外の苗床に置く。母は目を覚まして、また噛んでいる。牝牛たちは母と同じように噛んでいる。夫は家畜小屋へ行き、酔っばらう。牝牛たちは母と同じように噛んでいる。⁽⁹⁾

この母の醜さ。後悔も祈りもない精神の低級さ。牝牛が母と同じように噛んでいるのであって、母が牝牛と同じように噛んでいるのではない。つまりこの母は牝牛よりも動物的だ。母は食って、眠って、子供を産むだけ。なまやさしい夫の問いかけなどには何の関心も示さない。それでも子供は産む。そして夫の方も、それでも家畜小屋へ行って酔っばらう、つまり、動物的性的本能的行為の快感に酔う。産まれて死んだ男の子は、外に捨てられて苗床の肥やしにしかならない。

いったいこれほどこの誰の話なのか。これは、よそ事ではない。現在の我々人間のごく普通の家庭の日常を描写したものなのだ。そうであることを示唆しているのは既に上に引用した文の中の次の言葉だ。

「コーヒーをいれようか？」と彼はつぶやくようにたずねる。

この短編の中では、ごく普通の家庭の中でのごく普通の会話は、この一言だけである。このひとことは、逆にぞっとするほど現実的で効果的な一言だ。

この後にも引き続いて、夢の中の出来事のような超現実的な現象が語られている。

夫はストーブの上に横になり、眠る。母はふたたび2人の子供を産む。牝牛どもが嘔んでいる。父は母を屠殺する。彼は子供たちと一緒に母をたらいらげる。犬も一切れごちそうにあずかる。夫は自分のまちがい気づき、家畜小屋へ行って酔う。⁽¹⁰⁾

夫に火がついて、母はまた子供を産む。やせこけた夫が、肥った妻をまちがって屠殺したという。そしてその殺された妻の肉を夫が食し、殺された母の肉を子が食し、殺された飼い主の肉を飼犬が食したという。しかも、夫は自分のそのまちがい気づいても、そんなことには全然気にもかけず、その後すぐ他の女と性的行為に酔いしれる。こんなことは、牝牛どころか狂った雄ライオンでもしないであろう。この話は、さらに次のように続いている。

父が眠っている間に一番年上の娘がテーブルの上によじ登る。廊下に1人の人影が動く、見知らない男だ。置き時計が別の青い時を打つ。

そして夜。

娘は2人の子を産む。父が帰ってきて、すべてを見る。父は少し泣く。その後、彼は日なたに横になり、そのまま動かない。

その見ず知らずの男は父を苗床に埋める。種は発芽する。娘は嘔んでいる。その見ず知らずの男は家畜小屋へ行き、酔う。⁽¹¹⁾

娘も、母と全く同じことをするのだ。突然やってきた見ず知らずの男も、父と全く同じことをするのだ。父は死んで娘婿に捨てられ、苗床のこやしにしかならない。こうして人間の種の保存が行われていく。代々、同じことを繰り返しながら、いつまで続くことやらわからない。この話の残酷さや極端さは、野生動物の観察記録や、人間界でよくある事件を超えて、むしろ古代ギリシアの神話の世界を連想させる。そしてこの話は、神話的な説得力さえそなえている。

暗 第13話 この話は、次の言葉で書き起こされている。

それは部屋であって、同時に砂漠である。⁽¹²⁾

この部屋の北側には一つの扉がある。それと向かい合っている南側にも一つの扉がある。今、北側の扉から1人の役人風の男に付き添われて婚礼の正装を身につけた1人の花婿が姿を現す。今、この花婿は、この部屋の南側の扉のところに待っている花嫁を迎えに行くところである。この時、この花婿は、まだがっしりとした体格の元気な青年である。

ところが、この部屋は不思議な部屋である。つまり、この部屋は部屋であると同時に不思議な砂漠なのである。北側の扉から南側の扉まで、蟻地獄のよう

なV字型の道が通じているが、この道は直線が一番遠い道のりになるのである。そして、この砂漠は常に頭の真上から太陽が照りつけている。付き添いの男にとって、この部屋＝砂漠の北側から南側へ行くにはほんの1分たらずの時間を要するにすぎないのである。けれども、この花婿にとってはその同じ道のりを行くのに数十年間もの歳月を要するらしいのである。この花婿は、早く花嫁のところへ行きたくて、一直線の道を選んだのだけれども、歩けど歩けど、すぐ目の前の南側の扉はまるで蜃気楼のように遠い。息もたえだえ、南側の扉にたどりついた時には、花婿はもう既にボロボロの老人である。

「着きましたよ。」全くぶっきらぼうな声で付き添いの男は言う。「あんなに言ったでしょう。ほんの2、3歩だって。」……

消え入りそうな彼の視界の中で、その扉はゆらめいて見える。その扉は開いている。その戸口には、背が高く脚の長い娘が立っている。軽やかな花嫁のヴェールのほか、何一つ身にまとっていない。ヴェールは頭の上から垂れ下がり、全身をつつんでいて、淡い霧のように透明である。……

「とうとう！」彼女は大声で叫ぶ。「恋い焦がれて、私はもう死んでしまっそうよ。いったい彼はどこなの。どこにいるのよ。」

ところが、死ぬか生きるかの苦勞をして、やっと花嫁の待っている所にたどりついたというのに、この時、この花婿は次のような挙動に出るのである。

付き添いの男は花婿の方に向く。しかし、花婿は大いに苦勞してやっとの思いで手をもたげ、骨と皮ばかりになった細い指を、懇願するかのように、齒が抜け落ちてしわだらけになってしまった口唇にあてる。

つまり、この花婿は、いざという時になって、この役人ふうの男に、私が到着したことは何も言わないでくれと言わんばかりに、自分の閉じた口唇に自分の指をあてて懇願したのである。つまり、私があなたの花婿です、あなたを迎えに今来ました、さあ、私と一緒にになりましょう、と名乗りをあげる気、ないし勇気を失っていたのである。それを見て、この付き添いの男は、今度は花嫁の方に向きなおって、次のように言う。そして、事態は次のように思わぬ方向へ進んで行くのである。

「あなたの花婿は、北の扉のところであなたを待っています。お望みならまっすぐな道を通ってあなたを彼のところへ案内します。」

「行きましょう。急いで行きましょう。ほんの2、3歩でしょう。そうすれば、私はもう彼のそばよ。」

彼女は走り出そうとする。しかし、花婿が彼女の方に手をさしのべたの

で立ち止まる。途方にくれて彼女は一瞬、彼を見つめる。それから彼女は手に持っていた花束からバラを1本引き抜いて、彼に投げ与える。……

それから、付き添いの男は、その娘のうしろを追って行く。扉は北の地平線の彼方に巨大にそそりたっている。向こう側の扉へ向かって2人の影は砂丘の間でどんどん小さくなっていく。そして最後には、小さな砂漏斗状の曲がりくねった足跡だけが残る。

花婿は乳白色に混濁した眼で2人の影を見つめている。指でバラをまさぐりながら。

「彼女はなんて美しいんだろう！」と彼はつぶやく。「本当に、なんて美しいんだろう！」

砂の中へズブズブと沈みこみながら、彼はまだつぶやいている。「あの娘は、向こう側の扉のうしろで、はたして僕を見つけるだろうか？」⁽¹³⁾

実は、北側の扉のところでも、男女立場を入れ換えて、この南側の扉のところで起きた事態と全く同じ事態が起きるのである。こうして男と女は、各々自分の花婿、花嫁となるべき人に実際に出会いながら、このようにして行き違い、いつまでたっても一緒になれないまま、老いさらばえて行くのである。

暗 第16話 この話は、次のように書き起こされている。

この紳士は文字だけからできている。文字だけからできているとはいえ、当然、天文学的な数の数字からできている。とは言え、文字だけからできていることに変わりはない。

ここに彼のガールフレンドがいる。彼女は、見てのとおり、肉と骨からできている。これは何たる代者ぞ！ 見るからに楽しい、——おまけに、何といったってさわれるときているのだから！⁽¹⁴⁾

この2人が連れだって歳の市に出かける。舟型ぶらんこ、観覧車のところまでは2人の仲はうまく行く。やがて、この2人は射撃台のところに来て来る。そこにこのゲームのルールが書いてある。

1. 百発百中保証
2. 一発的中ごとに一発のおまけあり
3. 最初の一発は無料

紳士はこの遊技場の前を急いで通り過ぎようとするが、ガールフレンドはこの遊びをどうしてもやるべきだと、言い張る。しかし、彼はやろうとしない。というのは、この射撃では金属の鏡に映っている自分自身の鏡像を標的にして

射撃しなければならないからである。ところが、この文字だけでできている紳士には、こうしてガールフレンドと一緒に歩いているのが本当の自分なのか、それとも金属製の鏡に映っている鏡像が本当の自分なのか、確信がもてなかったのである。それ故、こういう一か八かの方法でどっちが本当の自分なのかを確かめる決断がつかないからである。ガールフレンドは彼に迫る。

「あなたが撃つか、私があなただを捨てるか、二つに一つよ。」と、彼女は怒って言う。彼は頭を横に振る。そこで彼女は他の兄さんと、肉と骨のことならおてのものの肉屋の兄さんと、どこかへ行ってしまった。紳士はそこにとり残されて、彼女の後ろ姿を見ていた。彼女の後ろ姿が人ごみの中に消えてしまうと、彼はゆっくりと崩れてゆき、ちっぽけな小文字と大文字のうず高い小山となった。その上を群衆が踏んづけて通りすぎて行った。⁽¹⁵⁾ こうして男は、女にふられて破滅してしまったのである。

暗 第17話 この話は次のように書き起こされている。そして、他の話と同様に、例えば夢の中でのできごとのように、超現実的な現象で話が進んで行く。

本来、問題は羊であった。でも、私たち人間も隠れていなければいけなかった。というのは、羊はすべて引き渡せという厳しい御触れに従わない者は即座に自分の命を危険にさらすことになったからだ。⁽¹⁶⁾

私たちは、羊を隠しておくのにもってこいのあきホールを見つけた。そのホールの内側は、壁にそって低い仕切り板でちょうどガレージくらいの小部屋に仕切られていたからである。私たちはそこに羊を追い込んで、羊を隠しておいた。ある日、そのホールの入り口に幌つきトラックが乗りつけられ、幌の中から数人の肉屋が飛び出してきたかと思うと、彼らはゾウの肉かマンモスの肉かと思えるほど大きな、まだ血がしたたる肉の塊を2、3人がかりでかついで、ヨイショ、コラショとかけ声をかけ合いながら、そのホールの中へ運び込みはじめたのである。私たちは、隠しておいた羊が見つかったのではないかと、度肝をぬかれた。しかし、彼らに羊が見つかった様子はない。ホールの中には一つの開いている扉があって、肉屋たちは延々と行列をなし、ヨイショ、コラショとかけ声をかけあいながら、次から次へとその扉を通して中へ、肉塊を運んで行く。不思議なことに、彼らは入って行くだけで、1人も出て来ない。ヨイショ、コラショというかけ声は、やがて次のような歌声に変わっていった。

いけにえもってこい！ いけにえはこべ！

いけにえないやつは、いけにえになる……⁽¹⁷⁾

その行列のそばに立って彼らを見ていた私たちも、やがて彼らの歌声に合わせて大声で歌っていた。そうする方が、私たちも彼らに協力的であるかのような外面をつくろうことができると思ったからである。私もその行列のそばに立って、その歌をうたいながら彼らが肉塊を運び込む様子を見ていた。不安に耐え切れなくなって、私はすぐ後にいるはずの妻ハンナの方を見た。しかし、そこにいるはずのハンナはいなかった。歌をうたいながら仲間たちの間をぶらぶら歩きながら妻を探していると、妻はこのホールの中の側廊のところで、小さな折りたたみ椅子に座っている私の母と話しこんでいるのを見つける。「ここにいたのか！」と声をかけると、妻は私にニッコリとほほえみかけて、また母と話し込む。肩越しに振り返ると、驚いたことに、さっきまで私が立っていたあの扉のそばに、もう1人の妻ハンナが立っているではないか！ あれは後ろ姿ではあるが、間違いなくハンナだ。しかも、そのもう1人のハンナは、踊る時のように両腕を側にもちあげ、その歌に調子を合わせて体をゆすりながら、パチッ、パチッと、指を鳴らしているのである。私は驚いて母のそばにいる妻ハンナの腕をグイッと引っぱった。「痛いじゃないの、一体何のつもりよ。」その時の彼女の顔は、私にはのっぺらぼうに見えた。それから私がいちばん恐れていたことが起きた。向こうにいるもう1人のハンナが振り返って、まるで私を捜していたかのように私の方へ駆け寄ってきたのである。あちらから駆け寄ってきたもう1人のハンナが、私のそばにいる妻ハンナに気づくと、彼女は立ち止まり、両手を伸ばし、笑いながら立ち止まった。「ヤイナ、あなたなの？」

私は叫びたかった。ちがう、ちがうよ。これはヤイナじゃないよ。これは君自身だよ！ しかし、そう叫ぶかわりにどうしようもなく膝がガクガクくず折れて、私は四つんばいになった。そしてメエーと鳴いた——メエー！

肉屋たちは歌をうたうのをやめていた。彼らは腰をかがめて大きな肉塊をかついで、うつむきかげんになって私たちの方をうわ目づかいにじいっとにらみつけている様子が見えた。⁽¹⁸⁾

実に不気味な話である。

暗 第21話 この話は次のように書き起こされている。

山の上の売春宮殿は、今夜は冷たい輝きをはなっていた。⁽¹⁹⁾

今夜にかぎって、売春宮殿は何千個何万個の豆電球でつくられている花飾りでライトアップされ、普段は暗い娼婦街の小路のすみずみまで、今夜は煌々と街路灯の明かりで照らし出されていた。今夜は売春宮殿の女王の婚礼の儀が行

われるというのである。

ぼろを身にまとった片脚の乞食が、頭に紙の冠をのせ、白い馬にまたがって、足どりも重く、その娼婦街の小路を山頂の宮殿の方へ向かって、トボトボと進んで行く。その乞食王の顔は、悲嘆のあまり風化してボロボロになっている。彼が花婿である。

山頂の売春宮殿にたどりついて、その中を進んで行くと、1人の老人が現れて、乞食王を女王の玉座の間へ案内する。その玉座の間の中央には、ニッケル色に光っている丸い壇があって、その上に娼婦女王が寝そべっている。女王の顔は鋼鉄のマスクで覆われていて、頭ははげている。象牙のような手足、胴体、はだかの体には毛は1本もはえていない。胸は非のうちどころのないほど美しい。しかし、その裸体は、解剖学教室の裸体のような印象だ。

「さあ、もっと近くに！」彼女はものうげに言った。「私の方へ登っておいで！」

……

「おまえの恋女房を牢屋の中で腐らせたのは、誰？」

「女王、それはあなただ。」

「おまえの子供を墮落させ、おまえに刃向かわせたのは、誰？」

「女王、それはあなただ。」

「おまえが脚をなくしたのは、どうして？ ……おまえを乞食にしたのは、誰？ おまえからすべてを取りあげ、おまえを汚辱にまみれさせたのは、誰？」

「それも全部、あなただ、女王。」……

彼女は壇から飛び降りて、彼の前に間近に詰め寄る。彼は顔をそむける。彼女は、彼のあごに人差し指をあてて、彼の顔をもちあげ、いやでも自分の目を見つめさせる。

「きのうはおまえは、聖母教会の階段で物乞いをしたそうだね。本当ですか。」

「本当だ、女王。」

「聞くところによると、たくさんの喜捨を受けたそうだね。山のようと聞かすが、本当ですか。貧乏人も富める者も、町じゅうの者が駆け寄ってきて、おまえに施したという。」

彼はうなずく。……

「みんながおまえを愛している。そうでしょう。」

彼はだまっている。……

「わかっているわね。私は今までに一度だって人に物を懇願したことはなかった。でも、今はお願い、お願いだから、おまえがもらった贈り物のうち、一番価値のないものでもいいから、一番小さいものでもいいから、無償で贈られたものを、たった一度でいいから私に分けてちょうだい。」

しばらくの間、発作的にすすり泣く泣き声しか聞こえなかった。……

「二つの物をとってある。この二つのうち一つを選んでいい。」……

「こちらに見せてちょうだい！」彼女はささやく。

「ほら、おれの物乞い用の腕だ。」——彼は、それをぼろぼろの上着から取り出す。

「これはおれがずうっと前になくした物だ。そして今回、かえってきたものだ。」

彼は、それを彼女にさし出す。それは使いこんだため、すりへっている。その腕のへりには、すりへってしまってもうほとんど読めなくなってしまった文字が焼きつけてある。女王はそれを解読する。忍耐と謙譲。彼女は首を横に振る。

「私のためのものではないわ。これはおまえのものよ。」

乞食は大切そうにその腕をしまって、シャツのえりぐりから1本の鎖を取り出す。その鎖には一つのメダルがぶらさがっている。そのメダルは小さい聖体展示台の形をしていて、その真ん中にはいびつな形のガラス玉がはまっている。そのガラス玉の中には一滴の黒い液体が入っていて、ゆらゆらゆれている。

「これは何なのか、おれにはわからない。」と乞食が言う。「ひょっとしたら祝福をめぐんでくれるものかもしれない。」

すばやく彼女はその鎖を彼の首からむしり取って、長い間、身じろぎもせず、そのガラス玉を見つめている。

「とうとう答えが見つかった。」彼女はささやく。それからくすくす笑い始める。その笑いはだんだん激しくなっていく、ついにはまるで何かに憑かれたかのように体をゆすって大声で笑い、叫ぶ。突然、大笑はやみ、彼女は壇によじ登った。……

「なぜ笑うのだ、女王。」

「神のウィットを笑っているのよ。神はたいしたウィットの持ち主よ、知ってたかい。このガラス玉は、私がまだ悪魔を信じていた頃、悪魔が私にプ

プレゼントしてくれたものよ。当時、私はまだ子供だった。ずっと前、私はこれを捨てようとした。煮えたぎる火山の噴火口の中へ投げ捨てたこともあった。それが今また、私のところに帰ってきた。——ちょうど、物乞い用の椀がおまえにもどってきたように。」

「それで、それは何なのか？」……

「祝福なんかじゃないわよ、貧しい友。いずれにせよ、おまえの思っているようなものではない。このガラス玉の中には、この世のものではないものが、この世界を滅亡させることができるものがおさまっているのよ。この地球上の全生命を消滅させるには、このほんのちっぽけな水滴で十分。この世の被造物はとてももろいので、それを消滅させるにはこのガラス玉を壊すだけで十分なのよ。」

彼女は鎖についているそのメダルを自分の目の前でぶらぶらゆらして、それを燃えるような目つきで見つめていた。

「これによって産み出す力はこの地上から奪われる。いかなる母胎ももはや子を産まなくなるでしょう。すべてが子を産まなくなれば、人類も消滅するでしょう。……」

「あなたはやるのか？」と彼はたずねた。歯はガタガタ鳴っていた。

「これを持っているのだから。」彼女は答えた。「やるでしょう。」

「いつ？」

「その時が来れば。」

「何かあなたを思いとどまらせることができるものはあるのか。」

彼女は、鎖をもて遊ぶのをやめて、しばらくの間考え込んでいた。

「私を愛してくれますか。」と彼女はたずねた。

「それは私にはできない。あなたを愛することは誰にもできない。」……

「それなら、神は？」

「神様だってできない。さもないければ、あなたは今のあなたではなくなる。」

女王はクスクスと嘲笑をもらした。……聞いてちょうだい、私は昨夜神の夢を見た。そうよ、夢を見たのよ。神と悪魔が私を手に入れようとして戦っていた。……一晩中ずうっと戦っていた。どちらが勝つか、私も本当に興味があった。ついに夜が明けた時、どちらの方が勝っていたと思う？

……勿論、神よ。……神が勝者だった。……ただ、始め、この両者のどちらが神だったのか、私にはもう見わけがつかなくなっていた。神と悪魔は互いの鏡像にすぎなかったのよ。私には、どちらがどちらか、もうわか

らなかった。」

乞食はもはや何も答えなかったので、彼女は言った。

「もうさがってもいいよ。」

1人きりになると、彼女は身動き一つしないで座っていた。灰色の服を着ている腰の曲がった小男が彼女の前に姿を現し、小さな咳ばらいをした。

「明かりを消しなさい！」と彼女は彼に命令した。「全部！」

そして、ほんの一瞬考えてから、彼女はつけ加えて命令した。

「永遠に。」

「あなたは何をするつもりですか。」と彼は、しわがれ声でたずねた。

彼女は答えた。「待つのです。」

灰色の老人は立ったまま彼女を見つめた。

「何を？」

彼女はもはや答えなかった。そこで彼は立ち去った。

一つ、また一つと、売春宮殿の明かりは消えた。ついには、この娼婦都市全体が、闇に沈んだ。⁽²⁰⁾

不可能な愛。永遠の闇。しかも、地球上の生命あるもの全体の消滅を、今か、今かと待つだけの永遠の闇である。

以上の短編に概観したように、性の野獣性、男女間の相互行き違いや相互不信、何よりもすぐ上に見た第21話の男女間の愛の完全な不成立と種の絶滅の危機等、性に関する暗い短編が5編ほどある。これらは暗い話であるとはいえ、これら自体既に薄めに薄められた毒で、これ自体、心を癒す効果を持っているのだと、エンデは言うかもしれない。しかし、それではやはり闇があまりにも深すぎるのではなかろうか。すなわち、毒があまりにも強すぎるのではなかろうか。これらの物語がホメオパティ―としての効果を発揮するためには、この闇にさしこむ光明も存在しなければならないのではなかろうか。それでは、これらの暗闇にさし込み、闇を照らすそれ自体光明と見なすべき短編は、この『鏡のなかの鏡』には存在しているのであろうか。それもやはり存在する。次の短編がそれであろう。

明 第14話 この話は、次のように書き始められている。

結婚式のお客様たちは踊る炎でした。お客様たちは、蟬のお城でお祝いのなかでも最も煌びやかな祝宴を挙行了しました。半透明の多色壁や数々の塔や門、そして窓々などが夜の国全土の隅々まで照らして輝いていました。

そこには荘重にゆらめく鳥が羽根をひろげたような形の黄金色の炎あり、敏捷な動きで互いにスッと入りこみあう細い銀色の炎あり、いたる所をピョンピョンとびはねて歩き回る小さな炎あり、ほとんど動かずに自分の席にとどまっている大きくて静かな炎あり、でした。大多数の炎は目がくらむほどまばゆい白色をしていました。濃いオレンジ色の炎もありました。紫色の炎もありました。燻煙を長くたなびかせてくすぶっている炎もありました。そして、いたる所に荘嚴な祭壇用の蠟燭（重要なお祝いの席には必ず見受けられるものです）もありました。要するに、この婚礼の宴には、何千人ものお客様たちが招待されていたのです。私もその1人でした。

私たちは皆、お城の色とりどりの蠟の壁を糧にして生命の火を燃やしました。私たちは心配ごとや細々とした用事などは全部忘れて、お城全体が溶けてなくなるまで燃えに燃えて、この華燭の宴を祝ったのです。⁽²¹⁾

このようにして、この婚礼の祝宴は、いかなる破綻もなく、ただただおごそかに、なごやかに、楽しく、客も城もすべてが夜を徹して燃えて輝き、すべてが光明と化していくのである。男性と女性とのかかわり合いには、いろいろな暗い局面はあっても、そこには神の定めとして純粋な光明があるのだ、とエンデは表現しているのであろう。この短編は、次の文で締めくくられている。

あれは神の国での荘嚴な祝宴だったのです。⁽²²⁾

(2) 憎悪、破壊、殺戮、死と再生・転生

男と女との関係という制限を超えて、一般的に人と人との関係という局面にある暗部を描いている短編も、当然のことながらいくつもある。それらを見てみよう。

暗 第18話 この短編は次のように書き起こされている。

夫と妻が展覧会を見に行こうとしている。2人はおめかしをして、ウキウキ期待に胸をふくらませている。⁽²³⁾

展覧会場へ行く。展覧会が行われている建物は、窓は一つもない。来客の出入り口一つしかない大きなコンクリートの箱のような建物である。その建物の前にちょっと広い緑地帯があつて、その真ん中をその出入り口に向かって来客用の通路がある。その通路にそって左右2列に、いくつもの入場券売り場が建ち並んでいる。この入場券売り場も、展覧会場となっている建物と同じように、コンクリートの箱である。しかも人一人がやっと座っていれるくらいの大きさ

しかない。そして、不思議なことに、この小さなコンクリートの箱には、入場券を売る小窓しかなく、販売員が出入りする出入口は一つもない。つまり、切符売りのおばさんや娘さんが、どういう方法でこの箱の中へ入ったのか説明がつかない。けれども、とにかく、各々のコンクリートの箱の中には、1人ずつ販売係の人が入っているのである。

夫は、行き当たりばったりコンクリートの箱のガラスの小窓をたたいて、身をかがめて小窓から中をのぞきこむ。中には、太った中年の女性が椅子に座ったまま眠っている。前よりもさらに乱暴にガラス戸を叩くとやっと目を覚ます。「大人2枚、いくらですか。」デブ女は2、3度うなずいたきり何も言わず、入場券も売ってくれずに小窓を閉め、また眠り込む。夫は、この女にはこれ以上かかわりあわずに、その隣のコンクリート箱の小窓をたたく。しかしまた、さっきと同じような具合になる。こんなことを何度か繰り返して、中に6歳か8歳くらいの太った女の子が座っている窓口で、やっと入場券を手に入れる。出られなくて困るだろうと夫が話しかけると、その娘は、それはそうだけど、一番残念なのは入場券を売るだけで、展覧会場で何が展示されてあるかを自分の目で確かめることができないことだ、と言う。

とにかく、やっと夫婦は一つしかない扉を通して展覧会場に入る。最初に展示されていたのはヒツジ。生きているものが置いてあるみたいで気味が悪い。次の間ではハタキ。次の部屋は砂漠の間で、砂がしきつめられているだけ。次は燃えている松明。次は網。次は箱型大時計。次はハト小屋。次は時限発火装置付き爆弾。次の部屋の壁には赤い色で「緑」という字が書いてある。タイトルは「文字」。次の部屋は、吐き気を催すような悪臭が満ちている。タイトルは「魚の目」。実際に本物の魚の目が一杯に入っている容器が置いてある。次の部屋にはふたの開いていない1個のブリキ缶が置いてある。タイトルは「ブリキ缶」。ここで、小柄な子供みたいな老人みたいな本当に妙な男が姿を現し、この「ブリキ缶」という作品は、コミュニケーションの不可能性を表現している傑作である、と講釈する。次は、「松葉杖」。次は「卵と葉」。次は、「望遠鏡」。次は「サーカスの鞭」。みんな、現物が置いてあるだけだ。しかし、これらの展示品はこのふたの開いていないブリキ缶を除いてすべて、この『鏡の中の鏡』の中のどこかに登場しているものである。つまり、この展示会場は『鏡の中の鏡』の中の世界そのものなのである。

いかげんに興味がなくなって先を急ごうとした時、どこかから火が出たらしい。白衣を着た医師がマスクをして、消防士を担架の上に乗せてもうもうた

る煙の中から出てくる。この消防士は明らかに第4話の中に登場していた消防士である。夫婦は煙でまっ黒になって出口へ向かって走り、幸いにも外へ逃げ出す。さっき入場券を買ったコンクリート箱の所に立ち寄って、さっきのデブの小さな女の子に、中で何事が起きたのか尋ねる。

「爆弾が爆発したのよ」と子供が言う。「ドーンという音が聞こえなかった？」

……

「でも奇妙ね」と妻が付け加える。「またもや戦争が始まったのかしら？」

「まだよ」とその子供は少しこまっしゃくれた調子で説明する。「さしあたってはドングの総理大臣の暗殺だけよ。」

「ええ？」と夫は言う。……「彼がここにいるなんて知らなかった。」

「人違いだったのよ。」とデブの子供は言う。「幸い、彼は今、カラン・エル・ツールでの総会に出席中よ。……吹っ飛ばされたのは1人の郵便配達夫だけよ。でもそれはほんの手違いにすぎなかったのよ。」⁽²⁴⁾

夫は、いや、吹っ飛ばされたのは郵便配達夫ではなくて消防士だったと言って聞かせても、このデブの女の子は自信たっぷり、吹っ飛ばされたのは郵便配達夫だったと言い張って、自分の意見を変えない。それだけ言い終わると、この女の子は窓を閉めて、また眠り込んでしまったのである。つまりこの女の子は、入場券売り場のコンクリートの箱の中にいながら、展覧会場の中で起きた出来事をその計画から実行、および、その結果まで、すべてをこの外来の夫婦よりも詳しく知りつくしていたのである。

この怪を筆者なりに説明すれば次のようになる。すなわち、この夫婦が入館した建物は、この展覧会への入場券を販売してくれた少女の心そのものであり、この夫婦が、この展覧会場の中で見たものは、この少女の心の中の想念だったのである。つまり、この展覧会では、Aという販売員から入場券を買って入館すれば、Aの心の中を見ることになり、Bから入場券を買って入館すれば、Bの心の中を見ることになる、というからくりになっているのである。そう考えれば、この短編はすべてがつじつまが合うのである。

それはそれとして、この短編はまだ続きがある。

夫婦は、出入り口からまだモクモクと煙りを吐き出している窓のない建物の側を通りすぎて行く。そのコンクリートの壁際に2人の医師が立っていて、ポンポンと壁をたたいて聴診器を当てて診察している。

「おかしいなあ！」と1人が耳から聴診器をはずしながら言う。「爆発は壁の内側でゆっくりと根を下ろし続けているぞ、どうやら。」

もう1人は頭をたてにふりながらつぶやく。「全く予期していなかった側生効果だ。」⁽²⁵⁾

つまり、この短編が言わんとしていることは、この窓の一つもないコンクリートの展示会場の建物の中、すなわち少女の心の中では、人を暗殺するための爆弾テロが実行され、その攻撃心・破壊心・殺意は、今もなお少女の心の中でどんどん根を張り続け、成長し続けているということなのである。これは、今も昔もこれからも頻発するテロリストの心の内の状態なのである。

明 第28話 この短編は、次のように書き始められている。

あらためて攻撃の火ぶたがきられた。弾丸がヒューヒュー鳴り、跳ね返った弾丸が遠吠えし、榴弾がうなり、城壁や天井が雷のような音をたてて崩れ落ち、夜の城郭は地獄だった。

ひげの独裁者は、真っ暗な廊下やホールや列柱廊を大股で、なかば宙を泳ぐように跳びながら逃げまわり、闇の中でこわれた彫像につまずき、床に落ちたシャンデリアに足をとられ、大理石の階段をころがり落ちて倒れ、そのまま横になっていた。気力をふりしぼって立ちあがり、ヨロメキながら前進した。黒光りのする革の制服はボロボロで、たくさんの銃弾を受けて穴だらけになり、がっしりした体には無数の銃弾が貫通していた。心臓にも、肺にも、肝臓にも腹部にも銃弾が貫通していた。額の真ん中にさえ、悪意にみちた第3の目のように丸い小さな穴があき、血が流れ出していた。彼は致命傷を負っていた。しかし、死ぬことができなかった。彼は自分が不死であることはずっと前から知っていた。他の皆も彼が不死であることを知っていた。

それでも彼らは彼を狩った、昔は彼が彼ら皆を狩っていたのに。⁽²⁶⁾
この独裁者は自分の過去を振り返って、次のように言う。

「俺は、正義を実現するために権力を持ちたかった。」こう叫ぶと、額の傷口からまた血潮が流れ出しはじめた。「しかし、権力を手に入れるためには、俺は不正を犯さなければならなかった。権力を手に入れたがる者は、誰だってそうせざるを得ないのだ。俺は圧政をやめたかった。しかし、そうするためには俺の邪魔だてをしようとする奴らを牢屋にぶち込み、死滅させねばならなかった。暴力をやめさせるためには、俺たちは暴力を使わざるを得なかった。悲惨さを取り除くためには、俺たちは悲惨さを引き起こさざるを得なかった。戦争を不可能にするには、俺たちは戦争をせざるを得な

かった。世界を救うためには、俺たちは世界を死滅させねばならなかった。
これが権力の真実だ！」⁽²⁷⁾

この独裁者が致命傷を負いながら、彼は死ぬことができないと言っている意味は、エンデやシュタイナーの思想を考慮して理解しなければならない。人は誰でも、死ぬと、その人はその人が生きてきた時間を逆方向にたどって大宇宙の最奥へ帰って行き、そこでひとたび宇宙生命と融合し、それから改めて個人としての生命として転生する。こういう意味で、生命は不死である、というのがエンデやシュタイナーの思想なのである。だから、この独裁者は普通の考え方ではもう既に死亡しているのである。エンデの考えによれば、彼の生命は宇宙の最奥の生命の源へ向かって旅立ったということになるのである。だからこの先の旅路は徐々に地球上の現世から離れて行く。時間を逆にたどるから、徐々に子供へ帰って行く。

独裁者は大理石の巨大なホールの中へ逃げ込む。どこに窓があるのか見えないが、どこか上の方から黄金の光がさしこんでくる。大理石の石柱をめぐるつとりつけてある螺旋階段をたどって、どこまでも、どこまでも、よじ登って行く。ついに天井につき当たる。やっと天井裏に出ると、灰色に煙る光の中に長い廊下が一直線に延びている。地平線の彼方まで、どこまでもどこまでも延びている。この廊下の両側の壁には、一定間隔に、みんな同じ緑色のドアがある。その扉には、どれもみな同じ401という室番号が打たれている。ハウレン草色の緑色のドアの部屋は、ここだけでなくエンデの他の作品の中でも時々登場し、小学校の教室を示唆している。『はてしない物語』の主人公、バスチアンの教室のドアも、ハウレン草色だった。この独裁者は、今は10歳、小学校4年生へさかのぼったのだ。この長い廊下はどこまで歩いて行ってもさっぱり変化がない。次から次と、401という室番号がうたれている緑色の扉ばかりである。おそらく、4年生1組には、エンデにとって一生忘れ難い何事かがあったのだろう。どれだけ歩いたか知れない。やっと彼は2人の子供を従えた1人の老人に出会う。独裁者は銃をかまえて廊下の真ん中に立ちはだかる。

「待て！ 動くな！」と血の気のない声で言う。

老人は落ちつきはらって、ゆっくりと近づいて行って、目の前につきつけられた銃口を見つめ、それから彼の身なり、彼の額の傷口を吟味して、ようやく事情がのみこめた様子で、彼の目をじっと見つめてつぶやく。

「わが息子よ——どうかこのまま通してください。私たちは先を急いでいるのです。……最後の務めなのです。」……

独裁者はゼーゼー鳴る肺で大きく息を吸い込み、気を取りなおして言う。

「念のため申し上げておきますが、父よ、外では世界は死にそうな人々であふれています。街路にも広場にも、彼らは群がっています。わめき声でかき消され、自分が言っている言葉さえ自分に聞き取れません。足元をのたうちまわり、足にしがみついて、追い払うことさえできません。世界には、父よ、死にかかっている者しかいません。世界自体が死にかかっているのです。しかし、父よ、いわば職務として、あなたは今死にかかっている1人の特別な者のもとへ急がなければならない。しかも、それを邪魔されることはお望みでない。」……

「そうです。」と老人は答え、悲しそうに独裁者を見つめる。「その通りです。どうしろとおっしゃるのですか。」

「よし」その独裁者はややしばらく思案して言う。「あなたのお供をすることにしよう。その今死にかかっている特別扱いの者の顔をぜひ拝んで見たいものです。」⁽²⁸⁾

こうして独裁者は、この老人と子供の後をついて行く。彼らは、その廊下をさらに進んで行くと、やはり401という室番号のついている緑色の扉が一つ開いている。彼らは、その扉を通過して広間に入ると、その正面の壁際に赤いビロードの安楽椅子が置いてある。老人は独裁者に、その安楽椅子に座るようながす。独裁者がそこに座ると、彼はもう全身の力が抜けて、何も感じなくなる。老人のつぶやく声が聞こえる。

「ねーん、ねーん、いい子だ、坊や、いい子だ、坊や」

重いまぶたをあけてみると、さっきまで老人だと思っていた人は、とても高齢の老婆であった。小声で歌いながら、彼女はゆっくりと金の盃を彼の口唇に近づける。彼はむさぼるように、ゴクゴク飲む。その盃がからになって取りあげられた時、彼は小さな乳児になっていた。

彼女は彼を自分のエプロンにくるんで、合図した。そうすると、レースのシャツを着た子供がやってきた。あいかわらず子守歌を歌っていた。子供たちは灰色にけむる壁を通り抜けて、彼と一緒に外へ出ていった。

老婆は彼を抱いて夜の城塞の広場を歩いて行く。しばらくの間、樹木の茂みの間で特定の場所を探しているらしかった。その場所を見つけた。それは草のはえている丘だった。榴弾か地震のために真ん中に割れ目が入っていたので、それは大きな陰部に似ていた。老婆は彼を抱いたまま中へ入った。彼はくるまれていたエプロンから出されても声を出さなかった。今や

彼は額のふくらんでいる、体を折り曲げた胎児になっていた。彼は裸だったので、彼女は用心深く彼を割れ目の奥深くの地面の上に置いた。

「ねーん、ねーん、坊や、さあお眠り！」

彼女が木の下で待っている子供たちのところへもどって行くのを彼は見ていた。それから大地の陰部は、ゆっくりと、気づかないほどゆっくりと、閉じ始めた。子供たちと老婆の黒い人影のむこうで、突然、巨大な城塞全体が火につつまれた。その炎は巨大なオウムチューリップに似ていた。⁽²⁹⁾

こうしてすべては浄化され、人は再び健康な新しい生命となって転生するのである。

なお、転生の仕組みや様子は、『モモ』の中でも『はてしない物語』の中でも詳しく描写されているが、その語り方は三者三様、各々違っている。

(3) 自由、平等、博愛の崩壊と再生

人間は生きている限り、各々の精神活動を営んでいる。もし精神に自由がなければ、人間はどうなるであろうか。心は病み、あるいはロボット化し、創造力を失い、人格は崩壊するであろう。

人間は社会生活を営んでいる。社会生活に秩序を維持せしめているのは法である。もし法が、その社会に所属しているすべての人々に対して平等でなければ、その社会はどうなるであろうか。公然と人を虐げる者が法のうしろだてを得、人々は互いに争い、社会は混乱し、社会秩序は崩壊するであろう。

人々は経済活動を営みながら、日々の糧を得、生存の物質的基本的必要性を満たしている。もし経済活動に博愛の精神がなく、利己的貪欲のみによって営まれたら、人々の日々の生活はどうなるであろうか。「万人は万人に対して狼」となり、大部分の人々は貧困に苦しみ、少数の人々は過剰所有によって病的になり、両者ともに不幸に陥り、資源は浪費され、自然環境は破壊され、結局は経済活動自体が崩壊することになるであろう。

精神活動に自由があって初めて人間は精神的に生き生きと高揚し、法の支配に平等がつかぬかかれていて初めて人間は平和に生活することができ、経済活動に博愛の精神がともなって初めて人間は豊かに生活することができるのである。自由、平等、博愛はフリーメーソンのスローガンであり、フランス革命のスローガンでもあった。シュタイナーと彼の影響を受けたエンデにとっても、これらは極めて重要なテーマであった。『鏡のなかの鏡』にも、これらのテーマを示唆する短編はいくつかある。

暗 第29話 この短編は次のように書き起こされている。

サーカスが燃えている。観客はあわてふためいて逃げた。円形の観客席はからっぽで、テントは煙と炎でつつまれている。……ピカピカ光るトランペットで、彼は壮大な別れのメロディーを吹く、気高く、そして滑稽に。⁽³⁰⁾

おそらく、このサーカスは、彼らに偏見と敵意を持つ人々によって焼き打ちされたのであろう。権力者の恣意により、あるいは思想信条の対立により、あるいは民族・人種対立により、同一の国の法のもとにありながら法的に平等に扱われなかった人々は、過去にも現実にも枚挙にいとまがないほど数多くいた。現在もそうである。将来においても同様であろう。

道化師は外に出る。群衆が火事を眺めている。彼はうずまく火の粉につつまれる。しかし、彼を救出しようとする者は、誰一人いない。道路に出ると、壊されて飛び散った窓ガラスが足の踏み場もないほど散乱し、路上にはひっくり返された自動車が燃えていたり、くすぶったりしている。路上の水たまりには死んだ犬や鳥がころがっている。犬、鳥に到るまで殺されたのだ。彼は物思いにふけりながら歩いて行く。

俺の存在は不可解でこっけいだ。しかし、俺が自分の決断で自分の他の存在を選び取ったことなんか一度だってなかった。人は誰だって、現に今そうである人でしかあり得ないのだ。自由はいつも未来にあるにすぎない。……大切なことは夢から覚めることだ。それにもかかわらず、我々は自由を追いかける。追いかけることしかできないのだ。しかし、自由は蜃気楼のように、いつも我々の一歩先にある。いつも次の一瞬先にある。いつも未来にある。そして未来は闇だ。⁽³¹⁾

この道化師は精神の自由の否定論者なのである。彼は否定論者にならざるを得ない社会的状況の中におかれているのである。それ故、彼は自分の存在を逃れようもない悪夢のように感じている。悪夢なら覚めたい。しかし、どうしたら覚めることができるのか知らない。その閉塞感に苦しんでいるのである。

混乱をきわめた市街の小路を進んで行く。

遠くから叫び声。それから数発の銃声、それに続く小機関銃の連射の激しいとどろき。これが夜をつげるいつものもの音なのだ。謀殺にあふれた夜、苦しみと拷問にあふれた夜。誰もが誰もを信じない夜。⁽³²⁾

道化師が市内に通じる小路を歩いていると、数人の黒い制服の軍事警察が、20人ほどの男女を後ろ手に縛って引き立てて行く。誰一人抵抗をしようとさえしていないのに、警官たちはしきりに彼らを棍棒で殴りつけている。今逮捕さ

れて、引き立てられて行く彼らは、決して犯罪者なんかではない。彼らは善良な市民なのだ。彼らは為政者の恣意によって憎まれ、しいたげられ、国家権力によって撲滅の対象とされてしまった人々なのである。彼らは公正な裁判にかけられることもなく、この後すぐ国家権力によって闇の内に虐殺されるであろう。今、引っ立てられていった男女は、この道化師の同朋なのである。

道化師が顔の化粧を洗い落とし、着替えをしていると、サーカスの団長が入ってくる。そして言う。「一緒にやるんだ。……他の皆はもう了解済みだ。で、君は？」つまり、秘密の地下組織を作って、レジスタンス運動をやろうという誘いなのだ。「決心してもらおう。」という座長の言葉に道化師はうなずく。今夜、真夜中、秘密の会議が開かれるという。これがその住所だ、けっして誰にももらすなどと言って1枚のメモを手渡される。それから、どこをどう通ったか知らないけれども、道化師はそのメモに書いてある住所のペンションの近くに出る。その路上には、死体、胴体のない首や手がたくさん乱雑にちらばっている。当のペンションの前では群衆が乱闘をしている。殴りかかっている男たちのうちの1人が道化師に気づき、彼を指さして、猛烈な勢いで追いかけてくる。道化師は横へ曲がって小路へ入り込んで逃げる。やっと誰も追ってこなくなったのを確かめて、目の前を見ると、そこに居酒屋がある。ほとぼりがさめるのを待つために、道化師は居酒屋の地下階段を下りて行く。客はみんな、だらしなく眠っている。たった一つ空いている席を見つけて座る。驚くことに、そこには団長がいたのだ。彼の話によると、我々の同志の誰か、今夜の秘密会議を軍事警察に密告した者がいて、先ほど、あのペンションは警察によって封鎖された。そのため、会議はついさっきここに変更された。それで、同志の何人かは、君が密告したのではないかと固く疑っている、というのである。おまえに最後のチャンスやる。俺の前座を務めて、何でもいいから俺の前にお前が演説をしる、というのである。と言ったかと思うと、団長はその場から姿を消す。道化師はとまどいながら壇に登って演説を始める。

尊敬すべき観客諸君、愛すべき夢見る諸君！　これからお目にかける演目は、世界で今回1回限りのものである。極度の精神集中を要する。だから完全なる静寂と太鼓連打をお願いします。これは真理の瞬間である。しかし、正直のところ、瞬間とは何か、俺は知らない。真理についても何一つ知らない。そして、「俺」という言葉で俺は誰を言っているのかさえ全く知らない。

諸君が世界と呼んでいるこの夢の中に俺がやってきた時、この夢はひど

いものだった、今もあいかわらずひどい。いや、さらに悪くなってしまった。……⁽³³⁾

演説中に、厚紙で作ったビールグラス用のコースターが飛んできて、体に当たる。投げているのは、さっき団長と何やらひそひそ話し合っていたこの店のバーテンらしい大男である。道化師は、それは悪意のない単なるおふざけだと思って、笑顔を向ける。でも邪魔だ。彼から遠いテーブルへ席を移して、その上に立って演説を続ける。早く団長が戻ってきて、この場の混乱を静めてくれないものかと、心待ちしながら。

俺は、夢から覚めるのを今か今かと、待ちに待った。しかし、俺は、覚めることができない。氷の下にもぐりこんでしまった泳ぎ手のように、浮きあがる場所を探した。しかし、その場所がないのだ！俺は一生の間、息を殺して泳いでいる。諸君ならどうするか、俺は知らない。⁽³⁴⁾

それでもまだコースターが飛んで来るので、今度は道化師が、その大男にコースターを投げ返す。勿論、笑顔はたやさずに。その大男は驚いて投げるのをやめる。しかし、今度は、大男とは別の方向から、ビール瓶が飛んできて道化師の頭をかすめる。見回しても、誰一人として身動きさえもしていないのに、ビール瓶やジョッキや灰皿などが、ますますひどく四方八方から雨あられと飛んでくる。もう避けきれない。背中や肩に何発か命中する。彼は演壇を下りて、さっき団長が出て行った調理場へ行くドアの方へ四つん這いになって逃げる。そのドアは鍵はかけられてはいないらしいのだが、押せど叩けど開かない。どうやら、向こう側から誰かがしっかりと押さえつけているらしい。ふり返ると、今はあのバーテンの姿もない。この瞬間、石でつくったジョッキが榴弾のように飛んできて、激しい勢いで彼の額に命中して粉々に碎ける。この短編は次の言葉で結ばれている。

乳児の顔のような年老いた道化師の蒼白い顔は、突然鮮血の朱に染まった。そして、その顔には、深い驚きの表情と完全な洞察の表情が浮かんでいた。ついにすべてを理解したかのように、彼はニッコリと笑う。彼の両腕は、観客の拍手喝采に感謝するためにいつもしていたあの儀式のような身振りをした。そして、壊れた破片で覆われている床の上に、まるで蠟人形のようにこわばって前のめりに倒れこんだ。⁽³⁵⁾

この道化師のおかれている存在状況は、ヒットラー政権下のドイツに取り残されたユダヤ人の存在状況を想像してみれば、多少は想像できるかもしれない。この道化師に、そして彼の同朋にも、法的保護はない。法的保護がないどころ

ではない。国家権力によって駆除の対象とされ、狩り出されているのだ。官権から追われているだけではない。自分の国の身の周りのすべての人々から迫害され、命をねらわれているのだ。さらに恐ろしいことに、地下組織の同朋をさえ信頼することができないのだ。誰もが誰をも信ずることができない。この道化師は、自分を組織に誘い込んだ信頼すべき自分のサーカスの団長によって謀殺されたのだ。しかし、こういう社会的状況の中におかれているのは、ヒットラー政権下のユダヤ人だけではなかった。今、現在でも、地球上のどこかには、こういう社会的状況の中に置かれている人々は、たくさんいるのである。

暗 第4話 この短編は次のように書き起こされている。

駅カテドラルは、濃い灰青色の大きな岩石の塊の上に建っていた。この岩塊は空虚なほの暗い空間を漂っていた。

このような島はまだ他にもあった。もっと大きなものもあったし、もっと小さいものもあった。それらは各々ちがう間隔で移動していた。……大多数の島は人が住んでいないらしく、まっくらだった。駅カテドラルが建っているこの島のように照明されている島は少数だった。この駅カテドラルは、バベルの塔のようにとてつもなく大規模な建築物だったが、たくさんの足場があることからわかるように、まだまだ完成していなかった。糸のように細い穴が貫通されている壁からは光がもれてきて輝いていた。内部からはオルガンの演奏が朗々と鳴り響いていた。⁽³⁶⁾

プラットホームの先端で、1人の消防士がたたずんで、途方にくれている。その近くに、黒い修道服に身をつつんだ若い女が大きな旅行用ケースを相手に悪戦苦闘している。消防士は、この女に近づいて行く。

「お手伝いしましょうか。どちらへ？」

「オルガンが聞こえるでしょう。間もなく私の出番なのです。窓口ホールに行かなくちゃ。」

スピーカーの音がガンガン聞こえてくる、13,711……13,710……13,709……
2人は、人に押しのけられながら、そして人をかき分けながら、ようやく切符売り場の窓口のあるホールにたどりつく。アーチ門をくぐりぬけて窓口ホールの中へ入って行くと、

窓口ホールはとてつもなく大きかった。天井は闇の中に消えていた。左側には一種の後陣のようなものがあり、右側にはその中ほどの高さの所に中2階がはめこまれていて、その中2階には山のように大きいオルガンがそそ

り立っていた。後陣の高いところには薔薇窓の代わりに大きな時計があった。文字盤は裏から照明があてられていたが針はなかった。その下の一段高くなっている平舞台が祭壇となっていて、その中央には聖櫃がデンと置いてあった。聖櫃は大きな金庫の形をしていて、その扉には5個の数字合せ錠が取り付けられていた。それらは、逆五芒星の位置に配置されていた。祭壇や聖櫃だけでなく、あらゆる突出部にも、あらゆる手すりにも、あらゆる可能な所には蠟燭が立てられていて、燈明がゆらめいていた。……

その祭壇の前には、くるぶしまでとどくうすぎたない灰色の長衣を着た数人のあわれなやつらが、まるで祭礼踊りをしているみたいに、ぴょんぴょん跳びはねていた。……その連中はありとあらゆる道具を使い、あるいはまた、株式仲買人のように群衆の頭越しに指で合図を送ったりしていた。時々金庫が開けられると、大量の札束があふれ出してきた。運の悪いやつらのうちの1人が、その札束の一つを取って、両手でおごそかに高々とかざし、群衆に見せた。群衆はひざまづき、オルガンが轟然と鳴り響き、1,000人のコーラスが「奇蹟と秘密！」と叫んだ。札束は前列の哀れな連中に分け与えられ、金庫が閉じられた。儀式は、すぐさま、また改めて再開された。札束を受け取る者は群衆をかき分けて前に出てきて自分の分け前を確保する。そうすると後から押し寄せてきた者が定位置につく。すばしこい手先がたえずはしごを昇り降りしていて、今もらったばかりの札束をどこか壁のずうっと高い所に運んで行って、せっせとたくわえていた。

この時になって消防士は初めて気づいた。壁という壁は全部、柱という柱は全部、それに彼が今よりかかっているアーチ門の柱も全部、積み上げた札束でできていたのである。⁽³⁷⁾

「逆五芒星」とは、逆さになっている人間、つまり、本末転倒している人間、つまり価値観が転倒している人間を象徴している。そうこうしているうちに、例の若い女は、この消防士に彼女のあの大きな旅行用かばんを預けてどこかへ行ってしまったのである。消防士はカテドラル内部の様子にすっかり気を取られているうちに、さっき女から預ったかばんがなくなっていた。聖歌隊席の方を見上げると、あの若い女が歌っている。彼女は聖歌隊員だったのだ。彼が聖歌隊席へ登っていってみると、彼女は黒い修道衣のすそをめくりあげ、みだらな姿でオルガン弾きのひざの上に馬乗りになって、オルガンひきの頸にしがみついている。旅行かばんをなくしたことを詫びると、彼女は言う。

「カチ、カチって、音が聞こえたでしょう？ 爆弾よ、あなたが私のため

に引きずって持ち歩いていたのは。時限爆弾、他には何も入ってやしない。」

……

「うわっ、とんでもない！ いつ爆発するかわからないじゃないか！」

「そうよ」と彼女は言った。……

「でも、」と彼女は小声でつけ加えた。

「あの爆弾はここのためのものじゃない。……」

ふうーっと深呼吸してあたりを見回すと、彼は聖歌隊席でひとりぼっちになっていた。「8,927……」スピーカーがどなっている。「8,926……8,925……」

向こう側の祭壇では、この間も奇蹟の金銭増殖が支障なく進行していた。……祭壇の左手にある説教壇の上には、今は、やせおとろえた老人が立っていた。ものすごく大きい鉤鼻のせいで、彼の頭はハゲタカのように見えた。頭には紙でつくった一種の司教冠のようなものをのせ、腕を大きくふりまわしながら演説をしていた。

「あらゆる神秘中の神秘——これにあずかる者はさいわいなり！ お金は真理であります、しかも唯一の真理であります。これは万人が信じなければなりません！ 我々の信仰が確固たるものでありますように！ しかも盲目的に！ 我々の信仰があってはじめて、お金はその真価を発揮するのです。なぜなら真なるものもまた商品であり、需要と供給の永遠の法則に従っているのです。我々の神様は嫉妬深い神様で、ご自分のかたわらに他の神々が存在することを我慢することはなさいません。それでも神様はご自身を我々の手にゆだねられ、ご自身を商品となさいました。我々が神様を所有し、我々が神様のお恵みを受けられるようにするためです。……」

「お金は万能であります！」と説教師が大声をはりあげる。「与えたり受け取ったりすることによって人々を結びあわせ、すべてのものをすべてのものに変えるのです。精神を物質に変え物質を精神に変えるのです。お金は石をパンに変え、無から価値を創造し、永遠に自己増殖するのです。お金は万能であります。お金は我々のもとにとどまっている神様のお姿であります。お金は神様なのです！ すべての人がすべての人のおかげで豊かになれば、最後にはすべての人が豊かになります！ すべての人がすべての人の負担で豊かになるのなら、誰にも負担はかかりません！ これぞあらゆる奇跡中の奇跡であります！ 親愛なる信者の皆様、あなた方は、この富はどこから来るのかとおたずねになるでしょう。ならば私が答えてさしあげましょう。富は富自体の将来の利益からくるのです！ 富自体の将来

の利益、これこそが私たちが今享受しているものなのです！ 今ある富が多ければ多いほど、将来の利益はそれだけ大きいのです。そして将来の利益が大きければ大きいほど、それだけ多く富は今ここにあるということになるのです。従って、私たちは私たち自身の永遠の信者であり、永遠に私たち自身の罪人（責務者）なのです。私たちは私たちに私たちの罪（責務）を許しているのであります、アーメン！」

「やめろ！」と、消防士が叫んで説教壇の階段を駆け上る。……

「不信神者だ！」と、説教壇のワシ鼻が叫ぶ。……

「不信神者だ！」と、群衆はわめきたてはじめた。「冒瀆者め！ なぐり殺してしまえ！」

こうして、カテドラルの内部は騒然となり、消防士は逃げまわる。

「6,314……」とスピーカーはどなっている。「6,313……6,312……」⁽³⁸⁾

逃げまわっているうちに、消防士は告解室を発見する。その扉を開けると、そこにあの修道服の若い女からあずかった大きな旅行かばんが置いてあったのである。消防士は全身の細心の注意をはらって、冷や汗をかきながら、恐る恐るそのかばんを開けてみると、中はからっぽだった。

「768……」とスピーカーがどなっている。「767……766……」数字を告げるスピーカーの無感情な声の後ろで、今は小さいけれども、しかしはっきりと、まぎれもなく、カチ、カチ、という音が聞こえてくる。その音はどんどん大きくなり、脅迫的になってきた。

消防士はやっとの思いで駅カテドラルから抜け出した。……なんとかプラットホームにたどりついた。今は、スピーカーの声は途切れることなく数をかぞえている。カチ、カチ、という音はハンマーのように鳴っている。

「153……152……151……150……149……」……

スピーカーの中のカチ、カチ、という音は耐えられないほど大きくなり、無感情な声が数を最後までかぞえあげた。

「7……6……5……4……3……2……1……0……」⁽³⁹⁾

エンデは、拝金主義の右肩上がり一直線の拡大経済は、永遠に続くものではない。それはいつか破綻せざるを得ない、と考えている。

この短編で語られている、いわば拝金教とでも称すべき人間の価値観の異様さと、その破綻というテーマは、1993年、エンデが64歳の時の彼の作品、『ハーメルンの死の舞踊』という副題のついている『ねずみ捕り男』という作品でも主題として取り扱われている。この作品は『鏡のなかの鏡』よりも約10年後の

作品であり、彼の死の2年前の作品である。経済活動は博愛の精神によって営まれなければならない。需要と供給の原理に基づいて営まれる無制限の利潤追求は人々に不幸をもたらすだけである。そういう経済活動は、それ自体、破綻せざるを得ないのである。これらは、エンデがシュタイナーの思想に進んで親しむようになった25、6歳頃からの、彼の信念であった。この短編は、狂った価値観に基づく経済活動の破滅を、つまりバブルを描いているのである。

明 第19話 この短編は次のように書き始められている。

青年医師は、治療室の片隅に座って事の成り行きを見ていることは許可されていたけれども、いかなる場合にも患者と話をしてはいけないし、決して邪魔をしてはいけないと、きつく言い渡されていた。⁽⁴⁰⁾

その治療室には、歯医者椅子のような椅子がある。その椅子は背もたれの後ろで、床と天井に固定されている1本の垂直なニッケル棒が通されていて、この椅子は、そのニッケル棒にそって自由に上下に移動するようになっている。その椅子には異常に肥満体の中年の婦人が座っていた。彼女は憑かれたようにひっきりなしに、いろんな種類の食べ物を食べ続けている。彼女が一口飲み込むたびに、椅子はカタパルト装置で射出されるように上の方へつきあげられては、蒸気ハンマーのような轟音をたてながら、また落下してくるのである。一口の食べる量が大きければ大きいほど、婦人の座っている椅子はますます高くまで飛び上がるのである。どうやら、彼女は、栄養の摂取によって体重が重くなるのではなく、むしろ軽くなるらしいのである。

「わたしは」と言って、斜め後ろに座っている彼の方へ大いに苦勞してやっとな振り向いた。「進行性重力症で苦しんでいるのです。絶えず食べ続けていなければ軽くなれない。たとえ2、3秒でも、今みたいに食べるのをやめると、すぐに体重が重くなるのよ。もし、2、3時間も全然食べないでいたら、私の骨格は私の肉の重みでつぶれてしまうでしょう。」⁽⁴¹⁾

彼は、彼女の治療装置を調べてみた。ニッケル棒と椅子の背面の間に一つの装置がある。それは一つのガラス製のシリンダーで、その中には空気ポンプのように、椅子が上下するのに合わせてピストンが上下している。これは、椅子が落下するときの衝撃をやわらげるための装置のようだ。そのガラス管の内部に、今まで見たこともない得体の知れない、この上なく醜い動物が入っている。特大の鳥蜘蛛とりぐもに似ている。ドスンとピストンが落ちてくるたびに、不意打ちをくらい、痛みのあまり無数の外肢を輪のようにまるめて、その鳥蜘蛛はもつれ

た糸玉のようになる。この動物は、この恐ろしい牢獄から逃げ出そうとするが、逃げ道はない。

青年医師は、厳禁されていたにもかかわらず、思わず知らず手あたり次第に器具をつかみ取り、ガラスのシリンダーをたたきこわしてしまった。クモのようなこの動物は、ドアの方へ向かって行く。青年医師はドアを開けてやると、その動物はスルリと外へ逃げた。外は夜の闇である。青年医師は見失わないように背をまるめて、かがみながらその動物のあとを追う。夜の街の静かな路地や庭を通り抜け、橋や階段を越え、アーチ門や高架鉄道の下をくぐりぬけて、とうとうその動物は一軒のみすぼらしい賃貸住宅の玄関にはいりこんで、そこに座りこむ。それ以上動く気配がない。青年医師は、何が起きるのかじっと待っていた。

まもなく、暗い廊下の向こう端から第2番目の動物がこちらの方にやってくるのが見えた。それはこのクモのような動物と同じ大きさだったが、その姿形は全然ちがっていた。それはがんじょうなハサミを持ったずんぐりしているカブト虫に似ていた。ほとんどそれと同時に、第3番目の生き物も姿を現した。これは他の2匹より少し大きめで、バッタに少し似ていた。この3匹は、額と額を寄せ集めてじっとしていた。この3匹の体は、タイルの床の上で三方向に光茫を放っている一つの星のようであった。……

長い間、それ以上何も起こらなかった。……もう立ち去ろうと決心した時、突然彼は耳をそば立てた。聞こえるか聞こえないかほどの一種独特の音が空中にただよっていたのである。そういえば、この音は気にはしていなかったけれども、既にしばらく前から聞こえていたのに、今やっと気づいたのである。さて今、注意深く耳をそばだててみると、この世のものとも思えないほどやわらかで純粋な三和音がますますはっきり明確に聞こえてきたのである。その美しさのあまり、彼は恍惚として目に涙が浮かんできた。見るからに嫌悪感を催させるこの3匹の動物が、3匹一緒になって音楽を奏でるなどということがあり得るのだろうか。暗くてうすぎたない片隅に寄りかたまっているこの3匹が、あらゆる和音の中でも最も純粋な和音を生み出すなどということがあり得るのだろうか。神よ、若い医師は恍惚として思った。神よ、この筆舌につくし難い幸せよ！⁽⁴²⁾

夜が白みかけて、この3匹の動物の合奏は止んだ。青年医師が外へ出ると、そこは緑地帯になっていた。そこにはベンチが置いてあった。そしてそのベンチには約10名程の男女の人々が座っていた。彼らも夜通し、あの美しい三和音

に耳をかたむけ、至福にひたっていたらしい。彼らの表情はおだやかで、彼に対しても好意的であった。青年医師は彼らに朝の挨拶をし、彼らに名前や住所をたずねてみたけれど、言葉は全く通じなかった。彼らが身につけている粗末な麻布の着物には、びっしりとキリル文字らしい文字が書き込まれていた。そうこうしているうちに、彼らが持っている袋の中で、オンドリが3回、甲高い大きな声で時の声をあげた。ここで、この短編は終わっている。

ところで、この短編は何を表現しようとしているのであろうか。最も醜い、見るからに嫌悪感を催す3匹の各々種類の異なる得体の知れない動物とは何か。そして、その動物の発する響きとは、その3匹で奏でる最も美しい純粋な三和音とは何か。これを解読するためには、エンデの思想と、『鏡のなかの鏡』におけるエンデの表現技法を理解しておく必要がある。

まず、この見るから嫌悪感を催す最も醜い3匹の動物とは何か。『鏡のなかの鏡』では、ほとんどすべてが正像と鏡像関係で出現する。鏡像は正像の左右逆、ないしは上下逆関係になっている。この鏡像ということが、抽象化されて正概念と逆概念という形で現されることも多いのである。神と悪魔が見分けがつかない姿になっていたり、最も美しいものが最も醜いものとなって現れてきたりする、という具合である。とすれば、見るからに嫌悪感を催す最も醜い、この得体の知れない生き物とは、最も好ましく最も美しいものと鏡像関係になっているものなのである。それ故、この最も醜い3匹の生き物は、エンデが追求した自由、平等、博愛を意味している、と解釈することができるのである。

この生き物が発する聞こえるか聞こえないかのかすかな最も純粋な響きとは何か。涙がこみあげてくるほどしあわせにするこの3匹の生き物の奏でる三和音とは何か。シュタイナーやエンデは転生を信じている。例えば人間は、この地球上の生活を終わると、つまり普通で言う死を迎えると、その人はその時まで生きた時間を逆にさかのぼって行く。そして、大宇宙の根源にたどりつき、そこで大宇宙の生命そのものと合一する。その大宇宙の生命そのものは、大宇宙の音楽と表現されたり、黄金の光と表現されたりする。死んで大宇宙の生命に合流したその人の生命は、永遠にここに留まるのではない。一人ひとりの生命はここで再び個別化されて、筆舌を絶するほど美しい純粋な生命として転生するのである。『モモ』の主人公モモが、屋外円形劇場の廃墟で、人の寝静まった深夜、1人じいーっと耳をかたむけて聞いていたのは、根源に帰還した生命が奏でる大宇宙の音楽だったのである。⁽⁴³⁾この音楽は肉体的感覚器官としての耳によって聞くことのできる音楽ではなく、超感覚的能力であるインスピレー

ションによってしか知覚され得ない音楽なのである。とすれば、この第19話中の、これらの最も醜い生き物が発している響き、初めのうちは気づかなかったほどかすかな響きとは何か。人間の社会生活のなりゆきで失われてしまったその人の精神の自由が、いわば死亡して、大宇宙の最奥に帰還して、それ本来の純粹無垢なものにたち帰った時発する響きであり、権力者や民衆の利害や偏見や恣意によって失われた法のもとでの平等が、それ本来の純粹無垢なものにたち帰った時に発する音響であり、拝金教を奉ずる経済活動によって失われた博愛が、それ本来の純粹無垢なものにたち帰った時に発する響きだったのである。モモの言葉で言えば、これらは大宇宙の音楽だったのである。そして、これら3匹の生き物が額を寄せ合って奏でる涙が出るほどしあわせな美しい三和音というのは、自由、平等、博愛が集合して、この三者が本来の純粹な調和関係にたち帰った時に発する響きだったのである。人の生命が転生すると同じように、自由、平等、博愛も、踏みにじられ破壊されても、また転生する。しかも、本来の最も純粹な、最も美しい調和関係に立ち帰って転生する。

第19話では、夜が白み始めると、これらの虫たちは、三和音を奏でるのをやめる。しかし、3匹とも額をよせ合わせたまま、ビクツとも動かない。青年医師はその場を離れて、外に出る。そこで彼は、オンドリが3回、甲高く時の声をあげるのを聞く。『鏡のなかの鏡』では、夜明けは転生したのやことが、実際に動き始める象徴として用いられる。夜明けと、3回のオンドリの時の声は、本来のあるべき姿で転生した自由、平等、博愛の再来を告げているのである。すなわち、本来のあるべき状態をとりもどした精神、本来のあるべき状態を回復した政治経済の社会組織の始まりを告げているのである。これが、エンデにとっての理想的な社会だったのである。今、ついに、理想的な社会の夜明けを迎えたのである。

もう一点、見のがすことができない暗示は、ここに登場する約10名ほどの農民らしい男女である。彼らの着ている上衣にはびっしりとキリル文字が書き込まれていたと書いてある。キリル文字は現代ロシア語の原形文字である。とすれば、これらの人々はロシア語圏の人々であろう。更に言えば、彼らはソ連邦——エンデが『鏡の中の鏡』を出版した1984年当時は、米ソの冷戦時代で、ソ連は米国とならぶ世界最強の国と見なされていた——の圏内のどこかの共産主義の国の人々であろう。彼らが、三匹の動物が奏でる世にも美しい三和音に耳をかたむけて至福の時をすごしていたということは、共産主義圏の社会に住んでいる人々が、自由、平等、博愛の最も完璧な調和を享受していたということ

になる。そして、彼らの持っていたオンドリが三度、大きな甲高い声で夜明けを告げる時の声をあげたということは、自由の夜明け、平等の夜明け、博愛の夜明けを高らかに告げたということになる。とすればエンデは、ソ連の共産主義社会に自由の夜明け、平等の夜明け、博愛の夜明けを見ていたということになる。ただし、このオンドリは羽根をむしり取られ、砕いた氷の入っている袋の中に入れられていた。それでもちゃんと生きていて、元気よく時の声をあげたのである。それを見て驚く青年医師を彼らはニコニコ笑う。ということは、ソ連圏のどこかでは、自由、平等、博愛の思想は既に夜明けをむかえていたが、当局からはまだ弾圧されていた。しかし彼らはそれを大切に守り、ひそかに享樂していたということ、エンデは示唆しているのかもしれない。

(4) 自己存在そのものの深淵の中の暗と明

人は日常、自分はここにいる・ある、ということに関しては何も不思議と思わないし、疑いも持たない。しかし時には、自分の存在そのものに不思議の念にかられたり、自分の存在の基盤が突然すっぽりと抜け落ちることがあったらどうなるのだろうか、不安に陥ることもある。また、自分が生まれてきたその前、さらにその前へと、存在の根源をたどって行けば、不明の深淵の中へ無限に落下していくばかりである。『鏡のなかの鏡』の中には、そういう自己の存在そのものの闇黒の深淵の中への無限落下の恐怖感を描いた短編もある。

この無限落下をやさしく受けとめてくれる大地はあるのだろうか。この暗黒の深淵にさしこむ光はあるのだろうか。

暗 第10話 この短編は次のように書き起こされている。

惑星が回転するようにゆっくりと、分厚い天板の大きな丸テーブルが回転している。その上に、山や森、都市や村、川や海などの風景がある。これらすべての中心に、小さな陶器製の人形のようにちっぽけで壊れやすい君が座って、いっしょに回転している。……

テーブルはドーム型のホールの真ん中にある。このドーム型ホールも、石の床、丸天井、壁と一緒に、惑星のようにゆっくりと回転している。

薄暗がりの中、遠く離れた所に、壁沿いに戸棚や長持ち、太陽と月を指している大きな箱型古時計、その間には星が描かれている壁、あちこちには彗星、そして頭上高くの円天井には銀河などが見える。このドームには窓も扉もない。ここでは君は安心だ。すべては君にはおなじみのものだ。

すべてが頑丈に組み立てられている。君はすべてを信頼することができる。
これが君の世界だ。

つまり、この君は、今、現に自分が身を置いているこの宇宙を永遠にして不壊なるものと信じ、かつ自分自身をこの宇宙と一体なるものと感じることにより、自分の存在性に何の疑いも持たず、何の不安も抱いていないのだ。

しかしある時、異変が起きる。この世界全体が地震に見舞われる。石の壁は二つに割れ、亀裂が入る。この亀裂はどんどん広がっていく。描かれていた星は飛び散る。そして君は、今まで目にしたことのないものの中をのぞきこむ。君の目は知覚することを拒む。君のまなざしは、久遠の中へ落下していく。輝く闇、静止している暴風、永遠に消えない稲妻。君が見つめることができる唯一のものは、音のしないハリケーンにさからって身をかがめている1人の人影だけだ。その人影は顔から足まで布で覆われている。その布は風ではためいて見えるが、絵のように動かない。覆われた姿はそこにじっと立っている。しかし、それは何かの上に立っているのではない。足の下は深淵だからだ。⁽⁴⁴⁾

こうして、あれほど盤石だと信じていたこの短編の主人公「君」の存在根拠であるこの宇宙に亀裂が走り、その裂け目から「君」が見たことのない世界が現れ、その虚空の闇の中に布で顔が覆われた人の姿が現れたのである。この人の姿は、この短編では、「彼」と称されている。この短編は以下のように、「君」と「彼」との対話を軸にして進んで行く。「彼」は言う。

「出て来なさい、血をわけた弟よ！」

「いやだ！」と君は驚いて大声を出す。

「向こうへ行け！ おまえは誰だ。俺はおまえなんか知らない。……なんで俺がそんなことをしなきゃいけないんだ。」

「今が潮時なんだ。」

「いやだ」君は答える。「いやだ、ここは俺の世界だ。俺はいつもここにいた。ここに俺はいたんだ。おまえなんか向こうへ行ってしまう！」

「すべてを捨てるのだ！」彼は言う。「自分から進んで捨てるのだ、そうせざるを得なくなる前に。さもなければ手遅れになるぞ。」

「不安なんだ！」と君は彼に向かって叫ぶ。

「その不安を捨てるんだ！」彼は言う。

「できないよ」君は返事をする。……

「落ちることを学べ！」

ドーム型ホールはゆっくりと回転を続ける。君も大きな丸テーブルと共にゆっくりと回転し続けている。しかし、君の宇宙に走った亀裂はもうふさがらない。君の宇宙はもうもとはにはもどらない。ひとたび遠ざかって行くかに見えた「彼」は、またもや近づいてきて「君」に命令する。

「さあ、来るんだ！」おだやかに低い声で言う。

「落ちることを学べ！」

「……おまえの言うことなんかに従うもんか。向こうへ行っちまえ！」

「おまえは落ちるだろう！」顔を布で覆われている男は言う。「学んでおかなかったら、できないだろう。だから、さあ、すべてを捨てるんだ！なぜなら、今すぐにもおまえを支えるものは何一つなくなるだろう。」

再び姿を消した彼は、三たび目に姿を現して君に言う。

「血をわけた弟よ、……俺の言うことをよく聞け、信用するんだ。おまえは、もはや、おまえが今いる所にいつづけていることはできないのだ。出てくるんだ！……落ちることを学んでしまえば、落ちることはないだろう。上も下もないのだから、どこへ落ちるというのだ。星たちは互いに衝突することなく、それぞれの軌道で互いに均衡を保っているのだ。なぜなら星たちは親戚同士だからだ。俺たちの場合もそうあるべきなのだ。俺の一部はおまえの中にあるのだ。俺たちは互いに支えあうだろう。それ以外に俺たちを支えあうものはないのだ。俺たちはお互いに惑星なのだ。だから、さあ、すべてを捨てるのだ！自由になれ！」

「いやだ！」君は叫ぶ。「耐えられないよ！……おまえの言う自由なんか、ほしくない！」

「さあ、自由になるのだ」と彼は言う。「さもなければ、おまえはもはや存在しなくなるだろう。」⁽⁴⁵⁾

君のまわりに何かが始まっている。君があれほど親近感を懐いていた君の世界が、君に背を向け始める。君は、起こることを起こるままにするしかない。君のまわりの世界は亡霊と化していく。君が立っている丸テーブルの円盤大陸も実在性をなくしていく。君は途方もない恐怖に襲われる。この短編は、次の言葉で終わっている。

「血をわけた兄よ！」君は言う。

「助けて！落ちることを教えて！」……

間もなく奈落のほか、何一つ存在しなくなるだろう。……学びもしなかったのに君は落ちるだろう。そして、それぞれの軌道で互いに支え合ってい

る星たちが親戚であるように、君は君の中に、血を分け合った君の兄と親戚であるものを捜すだろう。でも、君にそれができるだろうか。君はそれを学んでおかなかったのだから、君にそれができるのだろうか。

今、すべてが消滅してしまった。

潮時だ。

今だ。⁽⁴⁶⁾

こうして君の、すなわち人間の存在基盤は足元から消え去り、誰とも支えあうことなく、ただただ暗黒の虚空の中へ無限に落下して行くのである。しかも、心の準備を全然ととのえておかないままに。恐怖の虚空の闇黒の深淵の中へただただ、無限に落下し続けるのである。ここでの恐怖感は宗教的なものではない。足場を取り払われた時の物理的、身体的、感覚的な恐怖感なのである。

明 第22話 この短編は次の言葉で書き起こされている。

この世界旅行者は、この港町の路地を歩きまわるのはもう終わりにしようとして心に決めた。それと同時に、他のあらゆる都市のスラム街や宮殿、村々、幕営所や穩棲地、地上のあらゆる砂漠や原始林を旅することもやめた。……彼は世界中の奇蹟も秘密も見つけた。⁽⁴⁷⁾

そもそも彼が世界旅行を始めたのは、「彼自身の現存在の秘密を解明する鍵となるしるし」⁽⁴⁸⁾が、彼にだけ理解できる言葉の形で、この地上のどこかにあるのではなからうかと思ひ、それを探索するためだった。しかしそれは、世界のどこにも見つからなかったのである。今、彼は、この港町のとある中国風の売春宿とおぼしい建物の入り口へ続く階段に腰を下ろし、街に行く車や人をぼんやりとながめていた時、その希望は霧散し、旅を続ける気をすっかりなくしてしまったのである。その時、彼は後ろからかすかな声をつつましくかけられて、驚いて振り返る。そこには、飾り気のない服を着た浅黒い肌の小柄で華奢なアジア娘が立っていて、「失礼とは存じますが、このふつつか者のサービスを受けてはいただけないでしょうか」と声をかけられる。娼家の客となる気持ちは全然なかったけれども、この娘の気持ちを傷つけたのではないかと後悔し始め、ため息まじりに娘の指し示す手押し車のような乗り物に乗って、その建物の中へ案内されて行く。ここから先、この世界旅行者のたどる行程は、エンデが既にいくつかの物語の中で話している転生に到る行程と本質的には同じである。この意味では、本稿で既に解説した第28話で、独裁者がたどった行程と同じであるし、『はてしない物語』の中で、バスチアンがたどった「霧の海スカイダン」

から「生命の泉」へ到る行程とも同じであり、また、『モモ』の中の主人公モモが、「いちどもない小路」から「黄金ドーム」に到る行程とも同じである。但し、ここで問題とされているのは、自己の存在根拠の転生である。

この世界旅行者は、東洋風の娘の押す車に乗せられて、まず最初に長い大広間へ案内される。この広間は、その壁にも、床にも、天井にもピカピカに磨きあげられた石が張りつめられている。その石材には、共通の特徴のある木目模様がついていて、何らかのメッセージを伝えているらしい。しかし、彼はまだ不機嫌のせいで、彼にはまだそのメッセージの意味は何も見えてこない。

彼は、それからさらに次から次へと別の大広間へ案内され通されて行くのだが、これらの大広間は、それぞれ、彼が彼の存在感を徐々に回復していく過程を示す世界となっているのである。それらの広間を通過して行くうちに、彼はまず始めに、自分の外の世界と自分の内なる世界との相互疎外感は消え、自分の精神を外の世界にあるものとして体験し、同時に、自分の外の世界の事物を自分の内部にあるものとして体験するようになったのである。外界のすべてが、例えば1枚の枯れ葉でも、枯れ葉のほうから彼に近づいてきて、彼の心のもっとも深いところで親密な関係を保つようになったのである。

ほとんど黒に近いブルーの壁の大広間にやってきた時には、その壁に走っている割れ目からは無数の風景のミニチュアが筆舌を絶するほど優美に見えてきたのである。山、湖、滝、飛び散っている水煙には虹がたわむれている。そして、サラサラと落下する水の音までも聞こえてくる。その響きに耳を傾けていると、ガラスのように清澄で甘美な音楽らしきものが、次第にはっきりと聞こえてきたのである。この音楽は、この『鏡のなかの鏡』の第19話で、青年医師が至福の思いで一晩中耳を傾けていた3匹の動物の奏であるあの純粋な和音と同じ種類のものであろう。そして、また、モモが宇宙の最奥の黄金ドームの中、時間の花が誕生する池の端で聞いた、あの根源的生命の奏である宇宙の音楽と同じ種類のものであろう。今、この世界旅行者は、ついにその音楽を知覚できる境位にまで到達したのである。

それからずいぶん時間がたってから、2人は次の広間へと進んで行った。その室は、ほとんど白に近い黄色の壁の部屋だった。その壁には4個の円盤が、とりつけてあった。そのうちの3個は同じ高さに、もう1個だけはその半径分だけ他の円盤よりも高い所にとりつけられてあった。第1番目の円盤には、そよ風とともに波が走っていく水面を真上から眺めているような模様が描かれていた。その真ん中には、1匹のうなぎが体をくねらせながら泳いでいた。彼は、

その波のざわめきから言葉に似たものを聞いたような気がした。

「私を産み出してくれたのは海だ。」⁽⁴⁹⁾

この海は生命が転生・誕生する場としての海である。『モモ』でいえば、モモがマイスター・ホラの腕に抱いてもらって、長い廊下を進んで行って銀の扉を通り抜けた所にある黄金のドームの下の「時間の花」が生まれてくる池と同じ意味のものであろう。また、『はてしない物語』でいえば、バスチアンがファンタージェン国からこの現実世界に戻ってくる時、バスチアンが浴びて浴びて浴びて、飲んで飲んで飲んだ「生命の泉」と同じ意味のものであろう。

世界旅行者は、第2番目の円盤の方へ進んで行った。そこに見えたのは、最初は、すそ野は雲海の中に消えている雪を載っている山頂のように見えたが、しかし、よく見ると、それは両肩に白髪を垂れている人の胸像であった。その表情は、静寂そのものであった。じっと耳を傾けていると、ついに言葉が聞こえてきたのである。

「私は白髪老人・子供である。」⁽⁵⁰⁾

ここで言っている白髪老人とは、人間界で寿命を全うして死んだ人間、子供とは、死者が自分の生命を逆にたどって、宇宙の最奥に到って生命の泉・池で転生したばかりの人間を意味する。白髪老人・子供とは死・誕生という意味である。エンデの思想では、死は誕生（転生）である。終わりは始まりである。両者は一体のものである。この世界旅行者は、正にこの生命の秘密を悟ったのである。

世界旅行者は、第3の円盤の前へ進んで行く。それは、黄金色にたそがれている地下水の風景を、ガラスをすかして見ているような光景を呈していた。その光景にうっとりとして見とれていると、その黄金のたそがれから言葉が聞こえてきた。

「私は湖を産むだろう。」⁽⁵¹⁾

これは男性の生理機能を暗示しているものであろう。

この世界旅行者は、娘に導かれて最後の第4の円盤の前へ進んで行った。その円盤の上には何も見えなかった。あるものは、「静止した変化」だけであった。言葉が聞こえてくるのを待ったが、だめだった。ついに彼は、娘の手を握ってたずねた。

「どうしてこれは黙っているのですか。」

「もう話しました。」と娘は答えた。

「なぜ私にはそれが聞こえなかったのでしょうか。」

「おそらく聞こえたはずですが、旦那様。けれどもそれは、あなた様の記憶の中でやっと見つかることでしょう。」

「しかし、私は今それを聞きたいのだ。」

「旦那様」と、娘はほんのかすかな声で言った。「旦那様がそう願っているうちは、どうしてそういうことが起こり得ましようか。何も望まないということは何も区別しないということです。何も区別しないということは、見えないものを見るということであり、そして、沈黙を聞き取るということなのです。どうして旦那様は私を不幸にしようとなさるのですか？」⁽⁵²⁾

ここで言っている「沈黙」とは、この『鏡のなかの鏡』の第30話で語られている「あらゆるものごとに先立つ沈黙」⁽⁵³⁾と同じ意味の沈黙であろう。この第22話は次の言葉で終わっている。

娘は、……客の手を指先だけでやさしく引いて、黙って肩をならべて奥の広間へと歩いて行った。処女大陸の方へ、あけぼのの大洋の方へ。⁽⁵⁴⁾

彼はそこで、生命を体感し、自分の存在根拠を悟るであろう。この第22話の話の進行方向は、このすぐ前にとりあげた第10話の話の進行方向と、基本的には逆方向になっているのである。すなわち、自己の存在感の回復方向へ向って進んでいるのである。

(5) 終わりの見えてこない絶望感と始まりの確信・希望

苦しみは、その終わりが見えてこない場合、その終わりが見えてこないが故に、なお一層苦しく感じられるものである。タンタロスやシーシュポスの苦しみは、まさにそういう苦しみなのである。それが地獄の苦しみというものであろう。では、『鏡のなかの鏡』の苦しみも、タンタロスやシーシュポスの苦しみと同類の苦しみなのであろうか。それとも、『鏡のなかの鏡』の世界の苦しみには終わりがあるのであろうか。

暗 第3話 この短編は次のように書き起こされている。

屋根裏部屋は青空色だ。壁も、天井も、床も2、3の家具も。学生は机に向かって座り、両手で頭を抱えている。⁽⁵⁵⁾

この学生は、来週は試験があるというのに、この学生が部屋を借りている家主が死亡したのである。この学生は、この先、このままこの部屋に住んでいることができるのか、気がかりで仕方がない。もう1人、この家に召し抱えられている老召使いも、この先おはらい箱になって路頭に迷うことになりはしない

かと、気が気でない。それなのに、相続人たちは相談のテーブルについてはいるのだけれども、いつまでたっても結論に到達しないのである。

老人はハンカチで眼をぬぐう。「しかし、事態が正常にもどった場合、どうなるのでしょうか。その時、私はどうなるのでしょうか。教えてください！ このまま仕事を続けさせてもらえるかどうか。この超人的な労働に対して私は給金を払ってもらえるのでしょうか。それとも、私のようなヨボヨボの老いぼれは、どんなに努力をしてみたところで、結局は路頭に放り出されることになるのでしょうか。私の頭の上に吊り下げられているダモレスクの剣がおわかりでしょう。私の勤労意欲をなえさせているのです。正に、これによって、自分でこの剣をつりさげている髪の毛をゴシゴシ切りつけている！ 人間というものは残酷です！ お若いの、あなたの目の前にいるのは、絶望した男なんです！」⁽⁵⁶⁾

この家に間借りしている大学生は、この老召使いの掃除仕事を手伝うはめになる。相続人たちが会議をしている部屋へ行くと、床にはほこりが積もっている。テーブルの上にもほこりが積もっている。相続人たちは席についたまま目をつぶり、眠っている。来週に期末試験をひかえているこの大学生は、気が気ではない。相続人と相続人との間に椅子を持ち込んでテーブルにつき、テーブルの上に積もったほこりの中に指で数学の公式を書きながら試験勉強を始める。彼は、疲れて眠くなってくる。そして、この短編は、次の文で終わっている。

彼の頭はゆっくりとテーブルの天板の上へと沈んでいく。ほこりの中に書いた数学の公式の上にほっぺたをべったりとのせて、まるで子供のようによく深く呼吸しながら、彼はぐっすりと眠っている。⁽⁵⁷⁾

こうして、何もかにも、誰も彼も、宙ぶらりん。すべてが絶望とあせりの中。この状態の終わりのきざしも、事態の解決のきざしも、絶望と苛立ちからの脱出のきざしも、全く見えてこない。誰も彼も疲労困憊と絶望の泥沼の中へ陥り、そこからいつ抜け出すことができるのか、皆目見当がつかない。

暗 第5話 この短編は、次のように書き起こされている。

重い黒布が、左右と上方は暗闇の中へ消えて、垂直にひだをつけて垂れ下がっている。時々、ほとんど感じとれないくらいかすかな風に吹かれて、かすかに前後に揺れる。

これは舞台である。幕が上がり始めたら、直ちに踊りはじめなさい、と彼は言われていたのである。……

そういうわけで、彼は、立脚と休脚を交差させ、右手をたらし、左手はかるく腰にあてがって、幕があがるのを待っていた。時々、疲れてどうしようもなくなると、彼はこの姿勢を変えた。いわば、鏡に映った姿のように左右逆の姿勢をとった。

まだ、幕があがる気配はなかった。⁽⁵⁸⁾

いくら待っても、この舞台の幕はあがる気配はない。それでも彼は気を抜くわけにはいかない。いつ幕が開くかもしれないからだ。幕があがれば、全身全霊をこめて踊りを披露しなければならない。力強い太鼓の第一打で踊りは始まる。始まりをはずせば、すべてはおしまいだ。一度拍子をはずしてしまったら二度と追いつけないだろう。彼は頭の中で、もう一度すべてのステップをおさらいする。しかし、依然として幕は開こうとしない。疲れてくると、手を左右逆の姿勢にし、立脚と休脚を交代させ、彼は待ち続けた。最初の幸福な興奮は、次第に心の底からこみあげてくる怒りに変わっていった。虐待されているんだ、という感情がくすぶり始めた。できることなら、舞台から駆け出して行って、大声で苦情を言い、怒りをぶちまけたかった。しかし、どこへ向かって走り出せばいいのか、わからなかった。この短編は、次の文で終わっている。

いつしか、彼は、幕はいつかはあがるだろうと信じることさえしなくなっていた。……希望を懐いたり、腹をたてたりすることは、もうとっくの昔にしなくなっていた。何が起ころうとも、何が起ころなくても、とにかく彼は、今立っている所に立ち続けることしかできない。……彼にとっては踊りはもはや何の意味もなくなってしまったので、すべてのステップをも、すべての跳躍をも、一つひとつ忘れていった。待っている間に、彼はついに、なぜ待っているのかということさえ忘れた。しかし、彼は、立脚と休脚を交差させ、立ち続けていた。目の前には、ずっしりと重い黒布があり、その上の方と左右は暗闇の中へ消えていた。⁽⁵⁹⁾

初めはやる気満々の幸福感。しかし、舞台は始まらない。どこへ、誰へ向けていいのか分からない怒り。しかし、その怒りはあきらめへと変わっていき、踊る気自体をなくしていく。さらに彼は、やろうとしていた踊りのステップさえ、ことごとく忘れてしまう。しかし、彼は、この舞台を去ることができない。しかし、彼の舞台は永遠に始まらない。たとえ幕が開き、舞台が始まったとしても、今となっては彼は踊ることはできないであろう。それでも彼は、ここから退場することさえできないのである。何もかも絶望的である。

明 第24話 この短編は次のように書き始められている。

暗い空の下、人の住めない国がある。はてしない砂漠、爆弾の炸裂したクレーター、化石となった森、干上がった河床、延々と続く自動車の墓場。

その砂漠の真ん中に無人の都市。影また影、黒い窓穴、また黒い窓穴。都市の骸骨。

この都市の真ん中に歳トキの市チヤウがある。ここの静寂はどこよりも深い。観覧車の錆びついたゴンドラは冷たい風に揺れ、メリーゴーランドの馬は、ほこりをかぶって灰色になっている。⁽⁶⁰⁾

この歳トキの市場の真ん中に芝居小屋がある。1人の少年が、この芝居小屋の前に立っている。しばらくして、この少年は意を決して、芝居小屋の中へ入って行く。いっぱい繕ってつぎはぎだらけの幕が下りている。突然、前舞台のフットライトが、魔法のように裾から放射する。少年は最後列のベンチに腰を下ろして待つ。幕の後ろから芝居の前口上マウチウが聞こえてくる。この芝居は、ふつうの芝居とちがって、芝居の登場人物は観客の皆様サマタチの想念によって呼び出してもらわないと始まらない芝居だ。それで、私どもの魔術師が、登場人物の肉体化に成功するために、何とぞ想念を送ってご協力をくださらんことを観客の皆様サマタチにお願いする、と言うのである。例えば、綱渡りをする人の姿を想像してみたい。その綱渡りは命の危険をおかして……、と延々と前口上マウチウが続く。突然、キイキイ、ガタガタ、つぎはぎだらけの幕があがり始めたのである。

「ブラボー！」と声があがる。「紳士、淑女の皆様、そこにおられるどなたかは知りませんが、たった今、正しい答えを考えてくださいました。その方のおかげで、肉体化に成功しました。すべての始まり！ ほら！ 登場しました！」⁽⁶¹⁾

この少年が想念によって舞台の上に呼び出した登場人物は、パガートであった。パガートは前舞台に腰をおろし、足をぶらぶらさせている。とにかく、待ちに待った幕は、とうとう開いたのである。

「それで、おじさんは何をする人なの？」

と子供はたずねる。

「魔法使いさ」とその男は答える。「手品もするよ。」

「それで、名前は何？」と、子供は知りたがる。

「僕はね、名前をたくさん持っているんだ。」と、パガートは答える。「でも、始めはエンデエンデ（終わり）という名前なんだ。」

パガートはタロットの第1枚目のカード、すなわち始まりのカードなのであ

る。このパガートの名前は、「アム アンファンク・エンデ」、すなわち「始めは・終わり」だというのである。始めと終わり、終わりと始めは不離一体である。ここにM.エンデの根本的思想がよく表現されている。2人の会話は、さらに続く。

「おかしな名前。」と子供は言って、笑う。

「そうだね。」と、パガートは言う。「それで、君は何という名前なの？」

「ぼくは、ただ子供って言うんだ。」と、その子供は当惑して答える。

「とにかく、本当にありがとう。」と帽子の男は言う。「僕のことを思い浮かべてくれて。そのおかげで、僕はこうして君に自己紹介できたというわけさ。それで、これで芝居は終わりだよ。」彼はまばたきをする。

「もう？」と子供は言う。「それじゃ今、ぼくたちは何をやるの？」

「じゃあ」と答えて、男は舞台の端に座って足を組む。「じゃあ、何かを始めようや。」

「ぼく、おじさんのそばにいてもいいの？」とたずねる。

「みんな、君を探すよ。」とパガートは言う。

子供は、頭を横にふる。

「いったい、君はどこに住んでいるの？」と、パガートはたずねる。

「もう、みんながどこにも住むことができないんだ。」と子供は答える。「ぼくも、さ。」

「じゃあ、僕もそうだね。」と、パガートはもの思わしげに答える。「それでぼくたち、何をしようか？」

「一緒に出かけようよ。」と、子供は提案する。「ぼくたち2人、一緒に住むことができる新しい世界を探しに、さ。」

「いい考えだ！」と、パガートは言って、大きな奇妙な帽子をかぶる。「もし見つからない時は、2人で魔法で作り出そうよ。」

「そんなこと、できるの？」と子供はたずねる。

「まだやってみたことはないけど。」とパガートは答える。「君が手伝ってくれるならね。……ところで、君も適切な名前を持っていた方がいいと思うんだけどなあ。僕が君にミヒヤエルという名前をつけてあげるよ。」

「ありがとう。」と言って、その子供は微笑む。「これでおあいこだね。」

それから彼らは、芝居小屋を出て、歳の市を通りぬけ、都市をあとにする。彼らはまっ黒な空の下を歩いて行く。時々話し合いに夢中になって、地平線に向かって、2人の姿は、どんどん、どんどん、小さくなって行く。

彼らは、手に手をつないでいる。どっちの人がどっちの人の手を引いているのか、正確にはわからない。⁽⁶²⁾

これで、この話は終わっている。ミヒヤエルとエンデは2人1人である。こうして、ミヒヤエル・エンデは2人1人で、人の住めなくなってしまった世界で、人が住むことのできる新しい世界を探しに旅立ったのである。つまり、新しい始まりが始まったのである。ほっとする、そしてほのぼのとする光景である。

この第24話は、本稿で引用しなかった箇所を含めて考察すれば、エンデ自身が自分の基本的思想と彼の文学についての基本的な主義主張を最も素直に語った作品であろう。

(6) 神（信仰）の死と神（信仰）の復活

「神は死んだ。」ニーチェ（1844 - 1900）のこの言葉は、西洋のキリスト教文明圏の人々に強い衝撃を与えた。西洋文明は、今もなお、この精神的・文明的衝撃から癒えてはいない。そして、その後も、キリスト教文明圏の中での神の権威は回復の方向へ進んでいるのか、むしろ、失墜の方向へ進んでいるのか、混沌としている。エンデ自身、西洋のこの精神状況を明確に認識している。

『鏡の中の鏡』の中では、いわゆる神の死は人間の故郷の喪失として捕えられ表現されていたり、人間の出自の喪失として捕えられ表現されていたりしている。故郷がどこであれ、その人の故郷はその人の心のやすらぐ場所なのである。自分の出自がどんなものであれ、それを知ることは各自の存在の出発点を知ることであり、自己の存在に真に存在感を与えるものなのである。「誰の子でもない子」として生きることは、存在そのものの危機なのである。『鏡のなかの鏡』の登場人物には、帰郷はあるのだろうか。はたしてこの「誰の子でもない子」の出自は解明されるのであろうか。

暗 第12話 この短編は4ページで全部である。そして、何らかの出来事を展開したものではなく、神と人間とを隔てている深淵についての解説に終始している。次のように書き起こされている。

何世紀も前から我々が建築に取り組んできたが、この橋は決して完成することはないであろう。伸ばしても誰にも届かない手のように、この橋は我々の国の国境の断崖絶壁から張り出していて、その下には底なしの真っ暗闇の深淵が広がっている。……

この種の建造物は、向こう側からこちら側に向かって建設されない限り、完成できるものではない。そして、向こうでもこのような事業に取り組んでいる徴候に、我々は今までのところ一度たりとも気づいたことはない。あちらの方では我々の努力には全く気づいていないようである。⁽⁶³⁾

この深淵のこちら側（此岸）は、言うまでもなく人間側であり、あちら側（彼岸）は神側である。

正統派に属する人々は、彼岸（神）の存在は疑わない。しかし、彼らはその彼岸（神）に到達することは不可能であることは、ちゃんと心得ている。こういう人たちは自分達を「半分派」と名乗っている。

他方、彼岸（神）の存在そのものを疑っている人々もたくさんいる。彼らは異端とされているが彼らは自分達を「一面派」と名乗っている。一面派を名乗る人々の数は、ここ200年来、急に多くなってきている。この深淵にかける橋の建築作業に従事することは、一面派の人々に禁止されているわけではない。むしろ、それは倫理的に好ましいこととして見なされている。

半分派に属する人々の信仰によるにせよ、一面派に属する人々の思想によるにせよ、此岸（人間側）から建築し始められた橋は、永遠に彼岸（神）に到達することはないのである。それで、人々は、この両派のいずれの派に所属しているにせよ、結婚式の際には、花婿ないし花嫁は次のような奇妙な誓いを立てることになる。

まずは、一面派の花婿、花嫁の誓いの言葉は次のようになる。

「私はどこかからやってきたのでもありません。私には出生地がないからです。従って私は誰でもありません。そこで私はあなたを夫/妻とします。」
他方、半分派の花婿、花嫁の誓いの言葉は次のようになる。

「私は私の出身地からやってくることは不可能です。従って私はここにはいません。そこで私はあなたを夫/妻とします。」⁽⁶⁴⁾

キリスト教の神は創造主なのである。神の存在を否定することは、自分自身の創造主を否定することになる。このことを自分には出生地がない、と表現しているのである。こうして彼は「誰の子でもない子」となる。この意味で、神の存在を否定することは自分の生まれ故郷の存在を否定することになる。つまりその人は、精神的・宗教的に自分の故郷を失うことになる。キリスト教文化圏の多くの人々は、こういう不安な精神状態の中をさまよっている、というのである。

明 第11話 この短編は次のように書き始められている。

顔の内部、閉じられている目、他には何もない。

暗黒。空虚。

帰郷。

帰郷、どこへ？

どこへ帰るのか、俺にはもうわからない。

誰だ——この俺は？

俺は郷愁を患っているのだ。

思い出せ！

かつて俺が後にしたところへ。故郷へ。

そもそもおまえに故郷なんかあるのか？

おまえは故郷の息子なのか？

問うているのは誰なのか？

答えるのは誰なんだ？

目を開ける。しかし、見えるのは暗闇と空虚ばかり。⁽⁶⁵⁾

この短編は、自問自答形式で自分の心の中の情景の変化を、つまり心境の変化を描写した物語なのである。この人の心の中で問題になっているのは帰郷である。

長い心の闇が続いた後、ようやく心境の変化のきざしが見え始める。夜が明け始めたのである。はるか向こうに緑の森、そして川が見える。しかし、死に絶えたような静寂に満たされている。鳥はさえずらない。川の水でさえ冷たい鉛のように動かない。森のはずれに女が見える。岩石のように大きく、灰色で、顔をふせたまま編み物をし続けている。川にアーチの橋がかかっている。この橋は向う岸（彼岸）に達している橋である。その橋のたもとに、覆面をした2人の兵士が銃を肩にかけて立っている。

この2人が誰なのか、彼には分からない。しかし、彼には分かっている。

この2人は、彼の期限が切れるのを待っているだけなのだ。期限が切れれば、2人は橋を渡って、彼の家を焼きはらうだろう。俺の家、彼は思う。そろそろ俺の家を見なくては。

彼はそれを見る。

それは、彼の目の前の野原に、ほんの数歩離れた所に建っている。しかし、彼はその家を知らない。見たおぼえもない。彼をこの家に結びつけるものは何もない。この家でのつかの間の記憶さえもない。帰郷の時感じる、あ

のためらいの気持ちすら全然ない。……ただ見知らぬ建物に見えるだけ。大きな鳩舎に似ている。ここに住むのは不可能だ。

そこに他の家を置くためにこの家を消してみようとする。しかし、この家は依然としてここにある。改築を試みるが、それもうまくいかない。その代わりに彼は痛感する。まさにこの家のせいで、彼は責任を問われているのだ。彼は罪を犯した、明らかに重大な罪を。……彼は何をしたのか？ここで言っている「家」とは、神のことである。一度、神を失った者が改心して再び神のもとへ戻ろうとしても、伝統的な旧態依然たる神の家では、今の自分の身のたけが合わなかったのである。上の引用文に続く次の懐古文によって、彼の心の状況がさらに明確になる。

彼はこの家を、彼自身の我が家を否定し、そして見捨てたのだ。彼は、その我が家を裏切ったのだ。なぜなら、他の土地で大きくなったからだ。彼は天からの使者の殺し屋として恐れられ、天使の狩人として名を馳せていた。この種の獲物の狩りのことなら彼の右に出る者はいなかった。彼はいったい、どれほど多くの天使をほふり、臓腑を抜き取り、そして、そのつやつや光る風切り羽根や高価な皮を、魔法を解かれた世界の権力者たちや、彼らよりさらに権力のある彼らの奥方たちに売りさばいてきたことだろう！……

しかし、その後に郷愁がやってきた。彼はすべてを捨てて、故郷に帰ってきた。そして、今、彼はここに立っている。しかし、どんな異郷にいた時よりも、今、ここでの彼はもっと異邦人だ。そして、長い不在の間に、ネズミどもが彼の家を占領し、巣くい、死をまぬがれることができない疫病のようにのさばっている。これが彼が犯した罪なのだ。

そして、今、彼は夜明けまでにこの家を清掃しなければならない。この家をネズミのペストから癒してやらなければならない。さもないと、この家は焼き払われ、彼自身も消されるであろう。⁽⁶⁶⁾

彼の家（神）はペスト（死の病）を患っているのだ。彼はその家を観察する。彼が中へ入るには小さすぎる。おまけに、どの扉もどの窓も板が打ち付けられていて、ピクとも動かない。でも彼にはわかっている。中にはたくさんのネズミが息をひそめて巣くっているのだ。でも、素手でどうしてこれらのネズミを退治できようか。何か手助けになるものはなかろうか。味方をしてくれる動物はいないだろうか。彼は想念で1匹のオオカミと1匹のキツネを呼び出す。オオカミはその家に向かって全力で突進して扉に穴を開けて、頭を突っ込む。ひ

と吠えする。全身の力をこめて頭を引きぬく。すかさず、その穴からキツネが家の中に飛び込む。家の中から断末魔の叫び声、冥界のうめき声が聞こえてくる。中から赤い炎のようにキツネが飛び出してきて、気でも狂ったかのように野原で暴れまわる。

2人の覆面兵士は肩から銃をおろし、キツネに狙いを定める。彼は銃を構えている2人の兵士と標的のキツネとの間に身を投げ出して、両手を広げる。

撃つな！ と「誰でもない者の息子」は叫ぶ。キツネは撃つな！……

ためらいながら覆面男は、銃をさげる。キツネはぴったり彼の後によりそって寝そべり、舌をだらりとたらし、荒い息をして、首をかしげて彼の方を見ている。……キツネは、前足の間にころがっている小さな屍体を、鼻面で突っついてひっくりかえす。⁽⁶⁷⁾

この短編は、次の言葉で終わっている。

長い沈黙の後、2人の覆面男は再び銃を肩にかける。また、長い静寂の後、2人は重いおぼつかない足どりで、立ち去って行く。

「誰でもない者の息子」は、彼らの後ろ姿を見送る。そして今、思いがけず、もう二度と再び持つことはなかろうかと思っていた希望が、まるで温かい涙のように彼の心の中に湧き上がってきた。……彼は理解する。ようやく今、帰郷が始まったのだ。

向こうの森のはずれの大きな灰色の岩のような女は、編み物をする手を休めていた。手はひざの上のせてある。今までは彼女の顔は影のように暗かったが、今は、彼女はあけぼのの方に向いている。その顔は夜明けの輝きに明るく映えている。彼女は、静かな期待をこめて、どんどん輝きを増してくる天の方を見つめている。その天の輝きの中から解き放たれたのは、まだはるか遠すぎて定かではないが、ハチドリのような極彩色をきらめかせながらはばたき始めた2枚の翼だ。⁽⁶⁸⁾

夜明け、1点のしみもない天使の再来である。彼が狩った天使は、今、よみがえったのだ。彼はついに帰郷を果たし、希望はよみがえったのである。ただし、筆者は思う。これは「曙の天使」すなわちルシファーの再来ではなかろうか。まさか M. エンデは、そこまでは示唆しているのではなかろうけれども、と。

(7) 宗教的罪意識と宗教的救済者の出現

ニーチェの「神は死んだ。」という言葉は、キリスト教倫理の終焉を意味した。とは言え、キリスト教信仰は、ニーチェが断言したほど、断定的に終焉を迎え

たわけではなかったようだ。大まかに言えば、キリスト教への信仰は命脈を保っていた。信仰を失う者はいたであろう。けれども、信仰を回復する者もいた。それは、本稿ですぐ前に見た通りである。キリスト教倫理観の根幹は、「汝、殺すなかれ！」を含むモーセの十戒にある。キリスト者の罪意識は、このモーセの十戒に対する離反意識にある。この罪意識があって初めて罪に対する贖いの業、すなわち、イエスの十字架上の死が宗教的な意味を持つのである。この罪悪感があって初めてイエスはキリスト（救済者）となるのである。救済の業は十字架上の死によって象徴的に表現されているのである。『鏡のなかの鏡』の中では、このキリスト教的罪意識はどのように表現されているのであろうか。また、それに対する贖罪の秘蹟、すなわち罪からの救いはあるのだろうか。

暗 第8話 この短編は次の言葉で書き起こされている。

大理石のようにあおざめた天使が、審理の証人として法廷で傍聴人たちの中にまじって座っていた。⁽⁶⁹⁾

傍聴人席には、多数の傍聴人がいて、満席になっている。その中に1人の中年の非常に肥った婦人がいて、この女は審理中もほとんどずうっと居眠りばかりしている。

やがて、12人の緑色の手術衣を着た陪審員が入廷する。次に、ごま塩短髪の女性の弁護士と、ツルツル禿頭で赤ら顔でずんぐり体格の男性の検察官が入廷する。次に、明らかに日本の歌舞伎役者風の裁判官が入廷して裁判が始まる。

案件は申請 73-809VY91 である。これは、まだ名前を持っていない人物の肉体化の許可申請である。つまり、この人物とは、着床後まだ日も浅い胎児である。

ハゲ頭の検察官は、この申請の許可に反対する。この人物（胎児）は許可を受ける前に肉体化を開始してしまった。これは、認可規則 712 条 3 項に違反する。それ故、これを許可するわけには行かない、と主張する。

ごましお頭の女弁護士は、この申請者は父祖代々からの必然性によって肉体化を開始したもので、このことは生まれてくるすべての胎児にあてはまる必然性である。この申請だけを却下することは法のもとでの平等の原則に反する。法の番人であるべき当法廷が、法のもとでの平等の原則に反する判決をくだすべきでない。従って、この申請は許可されるべきであると、主張する。

これを皮切りにして、検察官と弁護士との間で反対と賛成の論戦が進められていく。審理をつくした後ついに、緑色の手術衣を着ている 12 人の陪審員は退廷する。そのなりゆきを見守っていた傍聴席の天使の翼や着物に、天井から黒

インクラしき液体が滴り落ちて来て、天使の翼はすっかり汚れてしまう。天使は身動きもしない。やがて若い女が洗面器をささげ持って入廷する。歌舞伎役者風の裁判官は、裁判官席を立て、若い女の前に進み来て、女のささげ持っている洗面器から覆を取り去る。その洗面器には、まだ温かい血がなみなみと入っている。歌舞伎役者風の裁判官は、その洗面器の血の中に指を入れて、小さな臓器をつまみ出し、大仰な仕草で自分の口の中へ入れて呑み込む。そして、こぶしを握りかためて若い女のこめかみを殴りつける。若い女は、その場で死ぬ。

この短編は、墮胎、すなわち胎児殺しの物語なのである。この短編は、次の言葉で終わる。

天使はあいかわらず身動きもせず立ち尽くしていた。目は閉じたままだった。全身に衝撃が走ったかのように、全身をふるわせて、声を出さずに泣いていた。

天使がふたたび目を開けた時、赤服男はその若い女の死体のそばにうずくまり、その若い女の顔をさすっていた。その2人のまわりには、5人の子供が、表敬の儀式をしているかのように顔の前に木刀を垂直にたらし、ささげ持って、大きな輪になって立っていた。

「まあ、なんてきれい！」と、土気色の顔をした肥った女が天使の後ろでつぶやいた。「子供たちは、いけにえと罪人のためにお通夜をしているのね……。」そして満足げにため息をもらすと再び眠りこんだ。

その他の傍聴人たちは、こうした成り行きにはほとんど気づいていないようだった。彼らは、風にかすかにゆれる灰色のあしの海のような観を提していた。⁽⁷⁰⁾

墮胎という胎児殺しの罪に対する世間一般のこの無関心さ！ 天使はなすすべもなく、悲しみの涙を流している。救いは見えない。

明 第7話 この短編は次の言葉で始まっている。

証人が報告している。彼は夜の草地に、おそらく森の空き地に、いたというのです。⁽⁷¹⁾

以下、2ページ半に渡って、この短編はこの証人の報告になっている。

その野原をぐるりと大きな輪を描いて、長いワイシャツのような白い長衣を着た人々が立っていました。彼らのうち何人かは松明をかかげていました。その他の人々は手に、大鎌や、つるはしや、斧を握っていました。

長い間、何事が起きるかと思ひそめて待っていると、ついに大声で命

令がくだされました。「松明を持っている者を殺せ！」それを聞いて、武器を持っている者たちは、松明をかかげている者たちに襲いかかりました。松明をかかげている者たちは、逃げようともせず、身を守ろうともせず、ただ黙って立っていました。

残忍な虐殺が始まりました。遠くで、近くで、繰り返し聞こえるのは、手斧やつるはしが無防備な者の肉体にくいこむ身のけもよだつにぶい音だけでした。

次から次へと、松明は血にぬれて消えていき、闇がひろがっていきました。

……広い野原は死体でおおわれていました。松明を持っている者を殺せと命じた声と同じあの声が、今度は、殺人者たちの長衣を殺された者たちの血にひたすようにうながしました。……

それから、風のざわめきの中で、……苦しみに押し殺した別の声が聞こえてきました。それは、「痛い！ 痛い！（Weh! Weh!）」と大声でうめいているかのようでした。しかし、あれは確かに「痛い！ 痛い！」と言っていたのではなく、「見よ！ 見よ！（Seht! Seht!）」と叫んでいるのだと私は思いました。

そこで空を見上げますと、この野原を斜めに横切って闇の中に1本のロープが張られているのを見つけました。そして、そのロープには十字形の姿で1人の人影がつりさげられていたのです。⁽⁷²⁾

凄惨な大量殺戮の証言。これは人類の歴史そのものであろう。そして、その上空に出現した十字形状のおぼろげな人影。宙吊り状態のこの十字形状の人影は、十字架上のイエス・キリストを連想させる。神に対して犯した人類の罪を、自からの生命を捧げることによってあがなったイエス。贖罪の死による救済者・イエス。凄惨な夜の野原の上空に、おぼろげながら出現した十字形状につりさげられたこの人影。この証言は、救世主の出現を暗示していると受け取っていいのだろうか。あるいは、救済者を切望するあまり見た幻影であろうか。救世主の幻影なら、幻影であっても見ないよりは見る方が心のやすらぎにはなるであろう。『鏡のなかの鏡』のラビリントス界にも救世主はいらっしゃるのだ。それ故、神様はやはり存在するのだと、エンデは言っているのであろう。

2-2 ラビリントスからの脱出は不可能か

第26話 この短編は次のように書き始められている。

教室の中は雨だった。どろ沼の臭いがたちこめていた。板の床はずうっ

と湿ってばかりだったので腐れて泥炭状になっていたからだ。そして、あっちにもこっちにも、大きな真っ白なより糸のかたまりのような硝石のしみができていた。高い所にある細長い3つの窓の窓ガラスは曇りガラスだった。外が見えて生徒たちの気が散ることにならないようにするためだ。⁽⁷³⁾

黒板の前にある背の高い真っ黒い教卓の上には、安置所に安置されている遺体のように、綱渡りの衣裳をぴったりと身にまとい、額には赤い日の丸の白はち巻きをした14歳くらいの男の子が横たわっている。先生はまだ来ていない。

生徒は6人だけ、てんでんばらばらに、雨傘をさして座席についている。男が2人、女が2人、そして子供が2人。これら6人の生徒たちは、各々次のような特徴を持っている。

1人目の生徒。年齢不詳のことさらに几帳面な身なりをした役人風の男。黒い山高帽の下の蒼白い顔には、一切の個性がない。

2人目の生徒。眼鏡をかけたひげ男。白衣を着て、一定の時間間隔で腕時計に目をやっている。

3人目の生徒。とても肥った婦人。

4人目の生徒。脚の長い、ほっそりした若い女性。ウエディングドレスに身をつつんでいる。

5人目の生徒。カラスの羽根のように真っ黒の長い髪の毛の、アーモンド形の黒い目をした東洋系の少女。

6人目の生徒。小柄でやせこけていて、たえず鼻水をたらしているきたらしい少年。背中には身体につりあわない大きな白い翼が突き出している。その翼は雨にぬれて毛羽立ち、重くぬれてたれさがっている。

この6人は、この『鏡のなかの鏡』の中で、各々どこかに既に登場していた人物である。第1の山高帽の男は、第13話の中で登場していた。第2の眼鏡の白衣の男は、第18話の中に出てきた医師だ。第3の異常に肥満体の婦人は、第8話にも、第18話にも、第19話にも登場していた。第4のウエディングドレスに身をつつんだ脚の長い若い女性は、第13話の中に登場していた。第5のアーモンド形の目をした東洋風の少女は、第6話に登場していた少女だ。第6のよごれた少年天使は、第8話の法廷で、傍聴席に座っていたよごれた天使のなれのはてだ。

そして、この教室の入り口のドアは閉め切りになっていて、誰も入ることも出ることもできなくなっているのだ。つまり、この教室は『鏡のなかの鏡』のラビリントスの中の世界そのものなのである。

初めは皆、互いに知らんふり。雨は降り続けている。てんでんばらばらに、ただ黙って座って先生の来るのを待っている。しかし来ない。それでも待っている。そのうちに、ひそひそと、私語が始まる。徐々に他の者も雑談に加わってきて、6人の活発な会話になっていく。いつまで待っても先生は来ない。相変わらず雨は降り続けている。彼らは待ち続ける。翼少年は、もしかしたら高い教卓の上に遺体のように横たわっている少年が先生なのかもしれないと言い出す。翼少年が教卓によじ登って遺体を覗き込んで、遺体が息をし始めたらしいと言う。皆で教卓の方へ駆け寄って、遺体に雨がかからないように遺体の上に傘をさしかける。アーモンド形の目の娘が、遺体少年の額から赤い日の丸の白はち巻きをほどいてやると、その綱渡り衣裳の少年は2、3度咳き込んで体を起こす。そして、この少年は、今先生はここにいないのだから、皆でここから抜け出す努力をすべきだ、と提案する。

「でも、ここからは抜け出せないわ。」と花嫁は叫ぶ。「ドアが閉まっているのよ。」

「どこでだって外へ抜け出せるさ。」と少年は返事をする。「もし夢変化することができればね。」

「いったいそれはどういうふうにするの？」と、アーモンド形の目をした少女はたずねる。翼少年もたたみかけるようにたずねる。

「夢変化って、何？」

「まったく馬鹿馬鹿しい！」と役人は怒鳴る。

「夢変化っていうのはね。」綱渡り衣裳の少年は言う。「新しい物語を作り出して、そして自分でその中へ飛び込んでいくことなんだよ。」……

「じゃあ、新しい物語を作り出すためにはどうすればいいの？」と、花嫁はたずねる。

「すごく簡単さ。」と少年は説明をする。「ぼくたち皆で芝居をやればいんだよ。」⁽⁷⁴⁾

ということで、綱渡り衣裳の少年の言うことを聞いて、皆で夢変化してみることにしたのである。まず皆で、雨でびしょぬれになっている黒板を自分たちの上着を脱いでふいて、黒板を乾かす。その黒板に、綱渡り衣裳の少年は、チョークで芝居の舞台の絵を描き、さっと、ひとつとびしてその絵の中へ飛び込んで行く。他の皆は、舞台をあちこち歩いている少年をあっけにとられて見ている。

「さあ、おいでよ！」と少年が叫ぶ。「急いで！ 雨だから！」

最初に舞台に飛び乗ったのは翼少年。すぐ続いて、アーモンド形の目を

した少女だった。その後から花嫁が続いた。肥った婦人は、後ろから医者
に押ししてもらい、前からはすでに舞台の上にあがってしまっている人々に
引っぱってもらわなければならなかった。それから医者が自分で飛び乗っ
た。几帳面な背広の男だけが、黒い傘をさして下に立って、決心しかねて
いた。……

「一緒に来ないんですか？」と綱渡り衣裳の少年はたずねた。

その男は頭を横に振った。

「信じられないのです。」⁽⁷⁵⁾

結局、この短編は次の文で終わっている。

幕が両側からゆっくりと降りてくる。その最後の瞬間に男は決心して、傘
をたたみ、書類かばんを小脇に抱え込み、帽子をしっかりとおさえて、幕
のすき間に飛び込んだ。

ひっきりなしに降っている雨が、黒板から絵をどんどん消していった。⁽⁷⁶⁾

この後には、この雨の降りしきる教室の中には、つまりラビリントスの中
には、人っ子一人残ってはいない。つまり、『鏡のなかの鏡』のラビリントスから
一人残らず脱出してしまったのである。脱出することなど、そもそも不可能だ
と思われていた『鏡のなかの鏡』のラビリントスにも、いともたやすく脱出で
きる脱出口が、ここ第26話にちゃんと設けられていたのである。

以上、煩をいとわず本文を引用し、論証してきたように、この作品『鏡のな
かの鏡』には、人間にまつわる暗い話ばかりが語られているわけではなく、そ
れらを照らす明るい話もあちこちにちりばめられているのである。ただし、こ
れらの物語の意味を正しく理解するためには、いろいろな象徴的表現や鏡像的
表現、さらには転生とか宇宙の音楽とか、自由、平等、博愛とかのエンデの基
本的思想をあらかじめ熟知しておく必要があるであろう。そのうえで、注意深
く、しかも何回か繰り返し読めば、この作品は世評で言われているように「混
沌」と「絶望」だけを描いている作品ではない。

男と女が行き違い、いがみ合うことがあっても、その闇の世界を隅々まで照
らし、夜を徹して燃えて、燃えて、燃え続ける華燭の典はある。憎悪と破壊と
殺戮の泥沼の中へ沈んでこの世の一生を終える人がいても、宇宙の高みでは純
粋無垢な生命の転生はある。自由、平等、博愛がことごとく完膚なきまでに踏
みにじられた社会があるにせよ、世界のどこかには完全な自由、平等、博愛が
存在し、しかも、この世のものとも思えないほど美しい純粋な三和音を奏で始

めている所はある。自己の存在を支える宇宙が崩壊し、虚空へ無限落下しても、自己の存在を受けとめてくれる曙の太洋の新大陸は存在する。この世の終わり、絶望が無限永遠に続くように思えても、終りはかならずある。そして、終わりは始まりである。始まりは必ずある。そして、希望も必ず生まれてくる。神への信仰を失い、自己の精神的・宗教的ふるさとを喪失しても、人間はいつかは帰郷し、神も天使も再来する。人間は宗教的な罪を犯すこともあっても、その宗教的な罪をあがなう救済者は到来する。

しかも、『鏡のなかの鏡』の迷宮は、脱出しようと思えばいつでもどこでも、夢変化によって脱出することができるのである。

この物語『鏡のなかの鏡』が、読者にただ死に到る病「絶望」だけを与えるのか、それとも逆に、ホメオパティによって「絶望」を癒す作用をおよぼすことができるのか、それは読者次第であろう。ただし、この作品は読者にホメオパティによる心の治癒効果をもたらす資質は十分そなえているということは、断言できるであろう。

ただし、この本を読む場合は、読み方を工夫した方がよさそうである。この本を読む時は、まず最後の第30話から読み始め、それから最初の第1話にもどって順に読み進み、最後まできたらそこでこの本を閉じるのではなく、また最初の第1話にもどって再び順にこの本を全部読み返す。それを何度か繰り返して、もう分かったと思えるようになったら第26話を読み終わったところで、この本を閉じるのがよいであろう。そうすれば、この本を読んだ後味に爽快な解放感が残り、ホメオパティ効果が出やすいであろう。そうしないで、普通に本を読む場合のように、最初から最後まで順に読んで、しかも、1回きり読んだだけでこの本を閉じると、暗い混沌たる迷宮の中に閉じ込められて出口を見つけることができなくなってしまったような、あんとんたる閉塞感を持ったまま、この本を閉じることになるであろう。そうしてしまえば、この本のホメオパティ効果はかなり減退することになるであろう。

注

- (1) 子安美知子著『エンデと語る』朝日新聞社 1986年 26～28ページ
- (2) Michael Ende >DER SPIEGEL IM SPIEGEL Ein Labyrinth< 1994年 Weitbrecht Verlag 9ページ
- (3) エンデは、自分の作品の中に登場する人物に命名する時、ちゃんとした意味のあるドイツ語の一部を変形し、その変形した語を名前として用いなが

ら、しかもその変形した語（名前）にその原形のドイツ語の意味を持たせている場合は他にも多々ある。例えば、『はてしない物語』には、容姿がファンタージェン国で最も醜い「アッハライ」（Achrei）と称するウジ虫、ないしはミミズのような虫が登場する。この虫は、自分の容姿の醜さを恥じて、一生の間、地下にもぐって暮らし、しかも一生の間、「アア、悲しい！ アア、悲しい！（Ach weh!）」と泣き悲しんでばかりいる生き物なのである。Achrei（アッハライ）は、悲嘆を意味する感嘆詞 Ach に、種類・職業を意味する接尾辞 -lei / -erlei を一部分だけ変形してつけ加えて合成した語である。従って、アッハライ（Achrei）という名前には、「アア、悲しい！ アア、悲しい！」と、いつも泣き悲しんでばかりいる者と、という意味がこめられているのである。『はてしない物語』では、バスチアンはアッハライたちを哀れんで、彼らをいつも陽気に笑ってばかりいて、毎日のらくらばかりして一生を送る美しい蝶に変身させてやり、その名も「アッハライ」を改めて、「シュラムッフエン」という名前を授ける。この Schlamuffen（シュラムッフエン）という名前は、れっきとしたドイツ語 Schlaraffen（いつも陽気にのらくらしてばかりいる者）という語の一部分だけを変形した語（名前）であることは、一目瞭然である。そして、この場合も、この Schlamuffen という名前には Schlaraffen の意味が込められているのである。そして、この場合にもこの名はその体を表しているのである。Michael Ende ›Die Unendliche Geschichte‹ 1979年 Thienemanns Verlag 279～281 ページを照合すること。

- (4) 子安美知子著『エンデと語る』朝日新聞社 1986年 66～67 ページ
- (5) 同書 122 ページ
- (6) 同書 68～71 ページ
- (7) Michael Ende ›DER SPIEGEL IM SPIEGEL Ein Labyrinth‹ 1994年 Weitbrecht Verlag 328 ページ
- (8) 同書 329 ページ
- (9) 同書 91 ページ
- (10) 同書 92 ページ
- (11) 同書 92 ページ
- (12) 同書 119 ページ
- (13) 同書 133～134 ページ
- (14) 同書 141 ページ
- (15) 同書 142 ページ

- (16) 同書 143 ページ
- (17) 同書 146 ページ
- (18) 同書 150 ページ
- (19) 同書 189 ページ
- (20) 同書 193 ~ 204 ページ。
- (21) 同書 135 ページ
- (22) 同書 138 ページ
- (23) 同書 151 ページ
- (24) 同書 162 ~ 163 ページ
- (25) 同書 163 ページ
- (26) 同書 273 ページ
- (27) 同書 282 ページ
- (28) 同書 278 ~ 280 ページ
- (29) 同書 288 ページ
- (30) 同書 289 ページ
- (31) 同書 299 ページ
- (32) 同書 290 ページ
- (33) 同書 310 ページ
- (34) 同書 311 ページ
- (35) 同書 314 ページ
- (36) 同書 39 ページ
- (37) 同書 41 ~ 45 ページ
- (38) 同書 52 ~ 57 ページ
- (39) 同書 59 ~ 60 ページ
- (40) 同書 165 ページ
- (41) 同書 166 ページ
- (42) 同書 170 ~ 171 ページ
- (43) Michael Ende ›MOMO‹ Thienemanns Verlag 1993年 第12章「モモ時間の生まれる国へたどりつく」144 ~ 166 ページ参照
- (44) Michael Ende ›DER SPIEGEL IM SPIEGEL‹ 1994年 Weitbrecht Verlag 93 ~ 94 ページ
- (45) 同書 93 ~ 99 ページ
- (46) 同書 101 ~ 102 ページ

- (47) 同書 205 ページ
- (48) 同書 206 ページ
- (49) 同書 212 ページ
- (50) 同書 213 ページ
- (51) 同書 同ページ
- (52) 同書 214 ~ 215 ページ
- (53) 同書 328 ページ
- (54) 同書 216 ページ
- (55) 同書 23 ページ
- (56) 同書 36 ページ
- (57) 同書 38 ページ
- (58) 同書 61 ~ 62 ページ
- (59) 同書 65 ~ 66 ページ
- (60) 同書 223 ページ
- (61) 同書 228 ページ
- (62) 同書 228 ~ 230 ページ
- (63) 同書 115 ページ
- (64) 同書 118 ページ
- (65) 同書 103 ページ
- (66) 同書 106 ~ 107 ページ
- (67) 同書 112 ページ
- (68) 同書 113 ~ 114 ページ
- (69) 同書 77 ページ
- (70) 同書 90 ページ
- (71) 同書 73 ページ
- (72) 同書 76 ページ
- (73) 同書 251 ページ
- (74) 同書 260 ~ 261 ページ
- (75) 同書 263 ページ
- (76) 同書 263 ~ 264 ページ